

令和5年度
ふくい高校生県議会



福井県議会

令和5年度ふくい高校生県議会の日程

開催日：令和5年8月1日（火）

13：00～13：15 日程説明
（議場）

13：20～14：40 模擬委員会
〔意見交換、提言書作成、
担当部局へ提出〕

【第1委員会室】	丸岡高校
【第2委員会室】	福井南高校
【第3委員会室】	敦賀高校
【第4委員会室】	藤島高校
【大会議室】	道守高校

14：45～16：00 提言書発表、写真撮影
（議場）

参加者名簿

【丸岡高校】

チーム「3233系」

氏名	学年
なかじま るあ 中嶋 琉亜	3
ささじま ゆめ 篠島 優芽	3
むねいし あいり 宗石 愛莉	3
あらい さゆき 荒井 沙雪	3

チーム担当議員：渡辺 大輔
森 嘉治

【藤島高校】

チーム「AGORA」

氏名	学年
はやし みずき 林 瑞希	1
なかの かおる 中野 薫	1
やまぎし さとし 山岸 聡	1
ひろの りょうすけ 廣野 涼介	1

チーム担当議員：山浦 光一郎
南川 直人

【福井南高校】

チーム「Mama's Bank Account」

氏名	学年
にしだ ももの 西田 杏乃	2
しみず ことろう 清水 虎太郎	2
すずき あおい 鈴木 葵	2
うちだ はるな 内田 春奈	2

チーム担当議員：田中 宏典
福野 大輔

【道守高校】

チーム「Sky-High」

氏名	学年
みなと きはち 湊 希八	2
すぎもと ゆうき 杉本 優姫	2
かさまつ みき 笠松 美樹	2
なかむら みづき 中村 珠月玖	2
にしの じゃねーる 西野 ジャネール	2

チーム担当議員：山本 建
中村 綾菜

【敦賀高校】

チーム「ONDOツルガ」

氏名	学年
もりの たくみ 森野 巧巳	2
なかた かなと 中田 哉音	2
もりぐち れんと 森口 蓮叶	2

チーム担当議員：小堀 友廣
北川 博規

◇チーム担当議員◇

ふくい高校生県議会に向けて、各チームを担当する県議会議員が高校を訪問し、質問の作成や委員会に向けての心構えに関してアドバイスを行ったほか、地域や学校の話題、県議会や県議会議員の活動などについて意見交換を行いました。また、当日の模擬委員会では、委員長、副委員長として参加しました。

丸岡高校 ☆ チーム「3233系」

渡辺 大輔 議員、森 嘉 治 議員



福井南高校 ☆ チーム「Mama's Bank Account」

田中 宏典 議員、福野 大輔 議員



敦賀高校 ☆ チーム「ONDOツルガ」
小堀 友廣 議員、北川 博規 議員



藤島高校 ☆ チーム「AGORA」
山浦 光一郎 議員、南川 直人 議員



道守高校 ☆ チーム「Sky-High」
山本 建 議員、中村 綾菜 議員



丸岡高校 3233系チーム 委員会会議記録

- 1 日 時 令和5年8月1日(火曜日)
午後 1時20分 開会
午後 2時39分 閉会
- 2 場 所 第1委員会室
- 3 出席委員 渡辺大輔委員長、森副委員長、
中嶋委員、宗石委員、篠島委員、荒井委員
- 4 欠席委員 なし
- 5 議会局職員 書記 大久保主任、山本主任
- 6 説明員 (未来創造部)
ブランド戦略室長
(交流文化部)
副部長(観光地域づくり)、新幹線開業課長、
魅力創造課参事(食文化)

○渡辺(大)委員長 ただいまから令和5年度高校生県議会、3233系チームの委員会を開会する。ちなみに、新幹線の車両名称に絡めて、3年2組と3年3組の生徒が参加しているということで3233系という名前になったことを伝えておく。

初めに、注意事項などについて幾つか申し上げる。

まず、発言の際は、挙手をして委員長の許可を得た上で発言してほしい。また、必ずマイクを使用してほしい。発言を始める前にはスイッチを入れ、発言が終わったらスイッチを切ってほしい。

次に、会議中は、パソコン、スマートフォンなどの使用が可能である。ただし、着信音が鳴らないなど設定をお願いする。また、撮影も可能であるが、ほかの人の発言の妨げにならないようお願いする。

次に、本日の出席者の自己紹介に移る。

副委員長から順をお願いする。

〔委員、説明者自己紹介〕

○渡辺(大)委員長 それでは、議事に入る。

本日議論するテーマについては、次第にも記載してあるとおり、委員の皆さんに考えていただいているので、まず委員からテーマについて発言をお願いする。また、テ

ーマについて説明者に質問等があれば、併せて願います。

○中嶋委員　まず、福井県の魅力・ブランドの発信について伺う。

福井県は、先月14日にリニューアルオープンした世界有数規模の恐竜博物館、国の名勝・天然記念物に指定されている東尋坊、開山700年を超える永平寺、6月末で来館者数13万人を超えた一乗谷朝倉氏遺跡といった名所や、越前がにやコシヒカリに代表される農林水産物など、魅力あふれる資源を有している。これらの資源を県内外へPRするため、県はこれまでこうした観光資源を生かした誘客プロモーションを展開している。これらは、私達も強力な福井の宝だと思うが、全国的に知名度があるかという、そうではないと考えている。

私が読んだ新聞記事では、北陸新幹線沿線で福井の印象を尋ねるアンケートを実施したところ、日本の白地図で福井県の位置を正しく塗り潰せなかった人が2割程度いて、北関東では北陸はどの県も同じようなイメージのようで、北陸新幹線の延伸を知らない人も多かったと書かれていた。私自身も探究活動の一環として東京の中学生に



アンケートを取ったが、福井県は眼鏡のイメージしかなく、福島県や福岡県と混同している生徒もおり、すごく悔しい気持ちになった。

そこで、福井県は何を福井ブランドとして発信していくのか、ブランドの磨き上げと発信力の強化について、県はどのような戦略を持ってブランド推進に取り組んでいるのか教えてほしい。

○ブランド戦略室長　本県のブランド戦略については、発信の土台となる県民の自信と誇りを醸成すること、そして県民の自信を基に戦略的にブランドを発信していくこと、この両輪で進めている。

本県の認知度を高めるためには、まず県民一人一人が自信を持ってふるさとを自慢できるようにすることが大切であるので、まちづくりなどで新しくチャレンジする県民の姿などを広く共有して、県民の自信と誇りの醸成を進めている。

また、委員御指摘のとおり、本県には恐竜や越前がに、一乗谷朝倉氏遺跡など全国に誇れるよい素材がたくさんある。例えば恐竜では家族連れなど、それぞれターゲットを分けて発信していて、どれか一つというのではなく、それぞれの分野の発信を通じて福井に行ってみたいとか住んでみたいというイメージにつなげることが大切だと思っている。

そうしたことから、こういうよいイメージにつながるよう、各分野で発信する際の核となる考え方——ブランドコンセプトと呼んでいるが、これの策定を進めていて、このコンセプトを念頭に各部局がそれぞれ自ら考えて行動し、それぞれ政策が高度化していくというようなことで今年度進めている。こうした取組を通じて、福井のよさを県内外に発信していきたいと考えている。

○渡辺(大)委員長 高校生であるので、答弁を少しかみ砕いて軟らかく願います。

○ブランド戦略室長 高校生に身近な携帯電話でいうと、iPhoneがあると思うが、Apple社はiPhoneとかiPadとかいろんな製品を一つに絞るんじゃないくて、いろんな製品を通じて革新的だとか、スタイリッシュだとか、そういうイメージをつくっていると思う。福井県も恐竜やいちほまれ、永平寺など、いろんなものを通じて福井県のよいイメージをつくっていきたいと思っている。

○中嶋委員 私も自分自身が福井県を誇りに持てるようになりたいと思っている。恐竜博物館とかをもし福井県のイメージにつなげるとしたら、福井県として具体的に取り組んでいること、テレビで発信するとか、スマートフォンのどういった機能を使って発信しているとか、私たちに届けるためにどういう活動をしているのかを教えてください。

○新幹線開業課長 恐竜というのは、福井県の断トツブランドというか、前面に押し出してPR活動をしている。来年の春に新幹線が開業するので、全国に浸透してきたブランドである恐竜を前面に押し出してやっているということである。具体的にどういった手法を取っているかという、北陸新幹線沿線の駅でいろいろPRをするけれども、ティラノサウルスの大きい実物大の骨格を実際に持って行って見ていただく。あと、フクイラプトルという福井産の恐竜がいるけれども、その実物大のバルーン、デザインも恐竜博物館の研究員に監修していただいて本物そっくりに作ったものがあるが、そういったものを実際に駅に持って行って大きさを感じていただく。そういったことで、恐竜についてはPRをしているということである。

○中嶋委員 今の話だと、福井県に来てもらった前提でのPRだと思うが、来てもらっていない上での、例えばお土産やお取り寄せみたいな形でPRすることは福井県ではしていないのか。

○新幹線開業課長 例えば物産を都会で身近に感じていただくということになると、福井の情報発信の拠点になる銀座のアンテナショップで物産も売っている。銀座はアンテナショップの集積地でもあり、今年リニューアルをして、銀座の広いところに引っ越したところである。開業に向けてアンテナショップが前線基地となって物産を中心にPRをしているところである。

○渡辺(大)委員長 例えば、若者はSNSとかインスタとか、そういうふうな発信を非常に得意としていたり、世界に発信したりというところを中嶋委員は恐らく言っていると思うが、それは後ほど再度確認するので、よろしく願います。

○宗石委員 現在はグローバル化が進み、観光や様々な市場においてターゲットを日本国内のみにとどまるのではなく、世界に向けていく必要があると感じている。金沢のまちでは実際たくさんの外国人観光客を見かける。金沢のまちのように外国人に

も多く来ていただくためには、福井県の魅力・ブランド発信においても世界の方々にアピールする必要があるのではないかと。

そこでまず、福井県を訪れる外国人観光客について、コロナ前はどのような国から多く来られていたのか教えてほしい。

そのことを踏まえ、福井県の外国への魅力発信の現状を教えてほしい。そして、今後どのような国や年齢層の顧客をターゲットとして魅力発信をしていくのか、県の戦略を教えてほしい。



○副部長(観光地域づくり) まず、外国人の観光客の現状について報告する。

観光庁の宿泊旅行統計調査を基にした県の推計によると、新型コロナウイルス蔓延前の令和元年の数字であるが、本県を訪れた外国人旅行客の方は台湾が最も多い国であった。次いで香港、そして3番目が中国というのが現状であった。

そして、魅力とブランド発信についてどのような取組をしているかということで、県としては方面別で実際に行うブランド発信の内容を変えている。まず、外国旅行客の多い東アジア、日本文化に大変興味を持っていただいている欧米、それから経済成長に伴って今後の旅行客の増加が見込まれると思われる東南アジア、例えばタイ、ベトナム、フィリピンをターゲットとして情報発信を行っている。これは県がもともとつくっているホームページがあるので、それを使った情報発信になる。

また、東アジアについては、アクティビティや体験物ということで、実際に工芸品を作ったり、あとはサップをやったり、そういうものに興味があるお客様にはそのような内容を発信している。また、欧米の観光客は永平寺、禅というものに大変興味を持っているので、禅の文化を中心に旅行の情報を発信している。また、東南アジアでは地域的に四季がないので、福井の桜、それから冬の雪景色、こういうものを中心に四季折々の体験を発信している。そのような中で県の魅力を中心に発信をしている。

○宗石委員 東南アジアの観光客に向けてホームページで情報発信をしているとおっしゃっていたが、主にどのような発信方法をしているのか教えてほしい。

○副部長(観光地域づくり) 例えば、タイのバンコクのお客様については、福井県はバンコク事務所がある。そこで現地のタイのスタッフに、福井県の魅力をタイ語に翻訳してもらって情報発信をしている。また、現地事務所から、こういう方面のお客様が興味があるというような情報も入手し、適宜ホームページの内容をリバイスしている。

○宗石委員 近年、観光ホームページなどで日本語を外国語に訳しての紹介などをよく目にする。日本人向けの目線や感覚で外国人向けの紹介などはよくあると思うが、外国人は日本人の思いもしないことに魅力を感じる人が多いのではないかと考える。例えば日本で一般的に食べられるような駄菓子などの味に感動される外国人も多

らっしゃる。

また、外国では大規模農業が主流であるので、日本のように個人で農業をされる方々に興味を持たれる外国人の方も多いのではないかと思います。丸岡においても、福井県でも有名なアニメやお城、着物などに興味を持たれる外国人はよくいらっしゃる。

そこで、インバウンド対策として、外国人目線で魅力を発信する取組について教えほしい。

また、県の観光担当課に外国人の方々を積極的に採用することも必要なのではないかと考えている。外国人観光客を積極的に誘致することに成功できれば、観光業の活性化に加え、新しい外国人目線から福井県のブランドとなるものの発見につながっていくのではないかと思います。このことについて所見を伺う。

○副部長(観光地域づくり) 御意見含めて御質問いただきありがとうございます。

おっしゃるとおり、海外のいろんな地区の方々をインフルエンサーという形で招聘をして、四季折々の観光地を回って撮影をして、母国語に戻して配信をしているが、私どもの職場に国際交流員の男性が1人在籍している。カナダ人で英語とフランス語、あと日本語の漢字も大変堪能な方である。彼を媒体にというか、私どもの気づかないようなところにも気づきを持ってくださるので、いろいろと日常会話を通して、彼がインスタ映えするような景色や写真を撮りに行ったりするときにアドバイスをしたり、あとはカナダ人目線でこれがいいというものを拾ってきてくれて、広報広聴課と連携しながら題材を決めて英語で発信をしている。やはり日常の中に何か落ちていていると思うので、日本人の目とカナダ人の目と、私どもの部署はダブルで物事を見ていきたいと思っている。

また、特に福井県は食べ物に関しては、お米、これは他県に勝るもので一押しだと思う。あと、タイの方から見たら、お米の種類が日本は短粒種、あちらは長粒種ということで、調理法と味わい、香りが全く違う。私個人の話になるけれども、そういうお米を世界の方々に発信して、特徴的なものをきちんとお伝えしていきたいと思っている。日本の代表食であるお米に関する外国の方の期待値というのは大変大きい。その中でも一番おいしい福井県のお米を、ぜひお試しいただけるように私どもも努力していきたいと思う。

○宗石委員 カナダ人目線と日本人目線での主な違いとか具体的な例を教えてください。

○副部長(観光地域づくり) これも私どもの部署の中で起きたことであるが、フランスの方はフランスパンを必ず毎朝買って、毎朝切って、残ったものは捨ててしまう。それはなぜかと言うと、味が落ちてしまうからである。防腐剤などが入っていないというのもあると思うけれども、やっぱり味わいが違う。パンの種類もいろいろあるけれども、カナダ人でもフランス語圏の方はやっぱり主食がフランスパンである。すごく面白いなと思ったのは、私たちはパンに必ずバターとかジャムとかつけるけれども、彼らはそれが主食なのでつけない。だから、そういうところは感性が違うなど思うのと、私たちもお米にふりかけとか佃煮とかつける方もいらっしゃるけれども、本当の

味わいを食するには何もつけない状態で食べるというのが一番おいしいと思う。だから、そういうところは共通点かなとは思っている。

あと、カナダ人の国際交流員が見つげてくるものというのは、町なかでも一本路地に入っているようなところだったり、デパートでもいろんなところを細かく見ていて、外国人の方が欲しいなというものが少し目の届かないところにあったりする。そういうものをきちんとフェイスブックとかで取り上げてPRするということと、あと彼のよさは通勤とか日常生活の中で一本路地に外れたところを見つけてくるので、そういうものも大切にしたいと思う。

○渡辺(大)委員長 そのカナダ人の方は、期間限定で県職員として採用されているのか、これからずっと福井県のために貢献してくれるのか。

○副部長(観光地域づくり) 1年更新でマックス3年だと伺っている。特例があるかどうかは分からないけれども、漢字まできちんと書ける方は少ないと思う。このぐらいのペースでも話が十分に伝わる。日本語、フランス語、英語、そして漢字も堪能な貴重な人材を福井県は大切にすべきだと私は心から思う。

○篠島委員 次に、高校生のアイデアを生かした観光事業について伺う。

北陸新幹線が今年度末に敦賀まで開業する予定だということであるが、私たちは地元丸岡の魅力を多くの人に知ってもらい、外国人や観光客をたくさん呼び込みたいと考えている。丸岡には、観光地でいえば丸岡城、食でいえば竹田の油揚げや丸岡そばなどのほかに、県外の方に十分PRされていない観光素材がたくさんあると思う。

福井県の各高校では、地元の食材を使ったオリジナルスイーツやグルメを考案する取組が盛んに行われている。丸岡高校の地域協働部でも竹田の油揚げを使ったミルフィーユを作り、地元のイベントで披露した。

私たちは、県内の高校生が考案した地産地消のグルメ等を起爆剤にして観光地に誘客すべきだと考えている。そのため、ホームページで県内における高校生のグルメコンテストについて調べたところ、坂井市が主催で開催した「高校生グルメto goコンテスト」が令和3年度以来、継続開催されていないようである。



そこで、県内全ての高校生を参加対象にしたグルメコンテストを毎年開催し、高校生が考案した地元の自慢できる食材を使ったアイデアを観光事業に生かすべきではないかと考えるが、県の方針と見解について教えてほしい。

○魅力創造課参事(食文化) 新幹線開業に向けて、福井へ人を呼び込むために食は欠かせないコンテンツの一つであって、県でも力を入れているところである。特に地元ならではの食材、食文化を生かしたメニューはとても人気があって、食を旅の目的として訪れる方も大変多くなっている。昔ながらの既存メニューだけでなく、感性豊

かな高校生の皆さんのアイデアを生かした新しいグルメは話題性もあって、若い方々を引き寄せる一品になると思う。

コンテストについては、県内の若い方々による福井の活性化を図ることを目的とした新たなチャレンジについての支援事業、県民ワクワクチャレンジプランコンテストというものもあるので、ぜひそちらのほうも活用いただけたらと思う。

グルメコンテストを開催するだけでなく、こういったすばらしいアイデアをアイデアだけで終わらせずに、ぜひ地元の飲食店の方々や食品メーカーの方々とタイアップしてメニュー化や商品化に持って行っていただいて、観光客の方々に継続して食べていただくことで、食べてもらう、買っていただくという仕組みをつくり、それを発信して地域経済の活性化につなげることで継続した取組というのができていくと思う。

県としては、それらの食が出来上がったら、東京のメディアなどマスコミ関係の方々に情報を提供して、県外の取材を要請したり、旅行会社等に売り込んで県内での食ツアーの造成を働きかけたいと思っている。

多くの方々を福井へ呼び込むために、福井を楽しんでいただく活動について、皆さんのような学生や地域の方々とか、市や県が一体となって取り組んでいきたいと思っているので、よろしく願います。

○篠島委員 福井県では食を使って県外の方を福井県に呼び込むことはしているか。

○魅力創造課参事(食文化) 県では、地元の今までのグルメだけではなく、新しい名物を作るということで、昨年から飲食店の方々と一緒に、例えば油揚げだったり、鯖寿司だったり、昔からのグルメを活用したグルメを開発して、そういったものを県内の居酒屋や飲食店、スーパーなど、いろんな方々に協力いただいて提供いただくことで情報を発信している。また、そういったものを首都圏のメディアや雑誌社の方々に取材いただくことで情報発信をしている。

○森副委員長 生徒の皆さんは非常に鋭い思いを語られているので、あまり私の出番はないかなと思っていたが、今ほど参事がおっしゃられた中で気になったところ、県民ワクワクチャレンジプランコンテストであるが、それをもうちょっと簡単に教えてもらえるか。

○魅力創造課参事(食文化) 今年はまだ要綱が出ていないのであるが、若者プランや地域の活性化プランに関するコンテストがあり、採択されると1件につき100万円もしくは20万円という制度があるので、そちらのほうで一度プランを立ててプレゼンテーションいただいて、そのコンテストで審査会が開かれて採択されると、その事業に対して補助金が出るという形になっている。

○森副委員長 それは今ここで提案されていたような高校生の皆さんが参加するということは可能か。

○魅力創造課参事(食文化) 多分若者枠というのがあるが。

○渡辺(大)委員長 多分高校生はないのではないかと。というか、今まで高校生で参加されていた人はいないと思う。

○魅力創造課参事(食文化) 委員長ご指摘のとおりだと思います。

○渡辺(大)委員長 この事業は3年目であるか。

○魅力創造課参事(食文化) そうである。

○渡辺(大)委員長 可能性があるかと採用されるようである。

○森副委員長 お金がどうのこうのというのではなくて、こういう要望を持っている高校生の皆さんがおられるということであれば、そういう枠をつくっていただけるよう、県のほうも参考にさせていただくとどうかと思う。せっかくの生徒さんらの気持ちを大事にさせていただけないかなという思いもあったので、お聞きしただけである。



○魅力創造課参事(食文化) 魅力創造課では、6月補正で計上したふくい魅力創造・発信応援事業というものがあり、こちらは福井を代表する地域資源を活用して、福井県の認知度向上、誘客促進を図るために魅力を発信する応援事業であるが、こちらの事業も高校生の方を想定しているかどうかは分からないが、どちらにしても先ほど申し上げたようにグルメコンテストを開催して、それをグルメとして、丸岡だったり地域に落とし込んでいただくという、それで一過性のものに終わらせずに継続して取り組んでいただけるような形にしていきたいと思っている。ぜひコンテストを開催して、地元の飲食業の方々と一緒になって、こういう事業のほうを取っていただけたら実現可能になっていくのではないかと考えている。

○中嶋委員 福井県のホームページで公表されている「FIRST291～北陸新幹線開業プラン～」を拝見した。その中で、福井県の観光課題として、土産や宿泊、若者や大人が楽しめるスポットに関する評価は全国平均より低く、リピーターも少ないということが挙げられていた。また、現地での観光情報についても低い評価となっている。

これらの課題解決に向けて、私たちは、観光地に高校生が考えた地産地消のグルメを販売するキッチンカーを配置し、地元の食材の魅力を発信するとともに、キッチンカーを配置したルートを地元の高中生にウオーラリー方式で巡ってもらいながら撮影したショート動画に音楽をつけてSNSで発信し、全国の若者を観光地に呼び込みたいと考えている。併せて、SNSで発信する際には、日本語だけではなく多言語対応とすることで外国人観光客も多く誘客したいと考えている。

お手元の資料、発信についてのイメージ図1を御覧願う。

この図は、SNS発信後、閲覧などの流れをイメージした図である。まず、SNSを見た閲覧者が福井県について調べたり、交通情報を探したりする。その後、福井県へ来てくださったり、福井県のご当地のものを取り寄せたりといった行動をしてくださる。そして、行動していただいた上で発信につながる。発信のときに多言語対応とすることで、ベースである外国人にも福井県のよさが伝わり、発信までの流れがそれぞれの観光客の数に影響し、増加していくと考える。

さらにこの図から考えられることとしては、行動する人のターゲットを絞ることで、発信の際に有利に働くと考えた。

次のページの発信についてのイメージ図2を御覧願う。

この図は、私が考える、行動してくれた人の中で発信につなげてくれそうな方たちである。ほとんどの人が観光地に来たら写真を撮ったり発信をしようと思うが、より影響力のある人たちをターゲットとしたほうが発信につなげてくれる。この図でいうと、真ん中の三角の部分である。

次に、SNS発信までの流れを説明したいので、次のページの資料を御覧願う。

SNS発信までの流れとしては、先ほども言ったとおり、高校生が提案した商品をご当地のお土産として商品化し、田舎を生かすという点を踏まえながらウオークラリー形式で商品に乗ったキッチンカーを探して購入していただき、発信をしていただく。田舎を生かすというのは、ウオークラリー形式で歩くことによって、観光客の目線で観光地を巡ってもらって、そのまちのよいところを観光客の視点で写真を撮って発信してもらおうということである。そうすることで、キッチンカー自体が、県でも国内外でも有名になって、福井県の人にも地域を知ってもらうきっかけとなり、それが私たち自身が福井に誇りを持てるようになって、さらに観光客が増加することにつながると思った。

そこで、高校生が考案した地産地消のグルメを販売するキッチンカーを各観光地に配置し、また、ウオークラリー方式でキッチンカーとともに観光地を巡ってもらいたいと考えている。その様子を撮影した動画に字幕をつけてSNSで発信し、多言語対応による外国人観光客の誘客を提案するが、県による予算確保や人員確保等の可能性について見解を伺う。

○副部長(観光地域づくり) 大変貴重な御意見をいただき、ありがとう。

キッチンカーを使えば設備投資も少額で済むし、あとはおもてなしするための家の清掃やリフォームも不要になるので、大変利活用しやすい案件のように受け取らせていただいた。

福井県庁でも水曜日のお昼にキッチンカーが正面玄関の駐車場に止まるけれども御存じか。ぜひ一度12時から様子を見にきていただければと思うが、県庁職員もお昼御飯は何となくマンネリ化して、お弁当屋や近所のスーパーで買ってくる人が多いけれども、やっぱり出来たてのものをその場ですぐ食べられて、あんまり待たされないというのが一番いいと思う。効率よく作って渡されるので、お昼休みも短時間でおいしいものを食べられるというメリットがある。

今回のお話は、一つのキッチンカーが一つのところにあるのではなくて、いろいろ

な県産品を使ったお料理のキッチンカーが数台あって、いろんな観光地の駐車場を使って販売をするという案件であるので、季節によってメニューを変えたり、あとはたまたま個人的に見つけたのだけれども、越前そばの里では越前そばをキッチンカーで販売されている部門もある。それを見ると、わざわざ出かけていなくてもそのキッチンカーが来てくれれば、町の足腰が弱った高齢層の方も購入してその場で食べられる。経済の活性化は決して来ていただく旅行者だけではないと思うので、今のお話は地元の方にも大変ありがたいお話ではないかなと思う。

あとは、冬をどうするかというところもちよっと課題があると思うので、地下を活用するとか、駐車するにも雪の被害を受けないようなやり方が何かあれば、逆に御意見をいただけるとありがたいなと思った。特に冬に温かいものを食べたらまたおいしいし、福井県民の皆さんは冬でも越前そばを召し上がるということなので、地下であれば外よりは寒くないかもしれないので、何かそんな工夫があればいいのではないかなと思う。

あと、ハピリンの前でもよく土日にキッチンカーが出てくるが、見ていると結構売り切れている。だから、お昼やって二巡しておしまいというか、冬の時期にああいうイベントを私はまだ見たことがないけれども、常に人気のあるものはすぐなくなってしまうと思うので、食材の補充をしてくれるような人がいて、また販売につながるようなことができるような運営の支援をしてくださる会社がコーディネートしてくれるというのもいいのではないかなと思った。



私の意見も入ったが、以上である。

○渡辺(大)委員長　中嶋委員が言っておられた、ウォークラリーというゲーム性のあるものも含めたというふうな点についてはどうか。

○副部長(観光地域づくり)　ウォークラリー型は、道の駅のスタンプラリーというものもある。道の駅でもいろんなところでスタンプラリーをするけれども、大抵は5つ集めてとか、10個集めてとか、あと1つか2つで条件が満たされるのになあと考えて、申込みが結局できないような場合も多いと思う。だから、ちょっとそういうハードルを下げてください、例えば3つにするとか、2つしか集まらなくても何かをしたら申込みができるとか、何かそういうのにつながるような、何か御意見を書くようなページを作るとか、それをSNSで発信したり、ホームページに上げたりして、みんなでも共有できるものがあつたらいいのではないかなと思う。

あと、スタンプラリーみたいな形にすると、その紙をいつも持っていないと、車のダッシュボードに入れていても外に出るときに忘れてしまったり、いざというときに使えなかったりすると思うので、携帯の中に情報として入れ込めるような、例えばQRコードで読み込むとか、紙を印刷するとCO₂削減に寄与できなくなるので、地球にも優しいのではないかなと思う。

そうすると、今度は携帯電話の充電がどんどんなくなってくるので、充電スポット

みたいなのも一緒にキッチンカーでできたら、なおありがたいと思う。

○荒井委員　また、私たちは従来の有名観光地だけでなく、知る人ぞ知る穴場の福井のすばらしい景色を国内外の人々にPRすることで、リピーターの獲得につなげたいと考えている。すばらしい景色を開拓する方法として、福井のフォトコンテストについてホームページで調べてみたところ、ふくい農ある風景フォトコンテストや、ふくいふるさとの音風景50選写真コンテストなど受賞作品が発表されてはいるが、国内外へのPRにはつなげていないように見受けられた。

私たち高校生が行きたいと思う観光地は、ホームページで検索、閲覧する方法が最初の一步ではなく、InstagramやTwitterによるファーストインプレッションによって決まると言っても過言ではない。そのくらい若者にとってSNSの影響力は非常に大きなものがあるし、SNSによる情報発信については外国人観光客の誘客に関しても効果的だと思う。そのため、県主催による若者を中心としたいいねフォトコンテストを実施するとともに、その受賞作品についてはInstagramなどのSNSで積極的に発信し、10、20代の若者及び外国人観光客の誘客を強化してはどうかと考える。

ちなみに、丸岡高校の北校舎から臨む味岡山や春の桜、新緑、紅葉、田園風景などは、四季折々に情緒深い写真を撮影することができる。また、正門に向かう階段から見える丸岡城が空の表情によっていろいろな姿を見せてくれる。お勧めのスポットであるので、ぜひ一度御覧いただければと思うし、誘客促進の一助になればと思う。

お手元の資料のフォトコンテストについてのページを御覧願う。

今から先ほど話した内容に関して具体的に説明する。

今までのフォトコンテストでは、受賞作品を通してうまくPRにつなげられていないと感じた。

次のページを御覧願う。

そこで、私たちは、議員の方がInstagramを通して公式アカウントをつくり、受賞作品を用いて福井をPRすることを考えた。Instagramは、写真を10枚一気に投稿できるという利点と、多くの人が閲覧することができるという利点がある。また、テレビで放送することによって、SNSを利用していない方も閲覧することができ、誘客につながる可能性があると感じた。

次のページを御覧願う。

次に、いいねフォトコンテストについて説明する。

いいねフォトコンテストは、福井の写真を投稿し、いいね数を競うというコンテストである。県内の人も県外の人も参加することにより、多くの人に福井の魅力を拡散できるという点がある。特に県内の人が拡散することによって、地元民しか知らない隠れた福井の魅力を発信することが期待できる。また、若者はSNSを使っている人が多く、若い世代の観光客を呼び込むことができるのではないかと感じる。



次のページを御覧願う。

このように、若者が自由にSNSで福井の魅力をPRすることを通して、福井の魅力を知る人が多く広まると思う。これにより、福井を知るきっかけにもなると感じた。

そこで、これまで県によるフォトコンテストにおいて、受賞作品の発表にとどまることなく、国内外の観光客向けにPRした実績について教えてほしい。

また、10、20代の若者及び外国人観光客に対し、高校生を中心としたいいねフォトコンテストを実施し、その受賞作品などをインスタグラムで発信することで誘客促進の強化を図ってはどうかと考えるが、見解を教えてほしい。

○新幹線開業課長 2つ質問をいただいたと思っている。

これまでの県によるフォトコンテストにおいて、受賞作品の発表にとどまることなく、国内外の観光客向けにPRした実績についてだが、このうち、私のほうからは国内観光客向けの実績についてお答えをする。

SNSを活用した情報発信、これは若い世代向けを中心として有効なPR手法と考えていて、県では県観光連盟とともに「私の好きな福井県」をテーマに県民に写真を投稿してもらうインスタグラムフォトコンテストというものを令和2年度から実施をしている。これまで2年度、3年度、4年度と3か年やってきて6万件を超える投稿が集まっていて、県民によるSNSを活用した魅力発信が定着してきているのではないかと感じている。

この投稿のあった写真については、県観光連盟のインスタグラム公式アカウントのフォロワーが約1万人いるけれども、ここでリポストしてシェアをしていて、観光客に幅広く発信しているほか、福井県公式観光サイトであるふくいドットコムにおいてもインスタ映えスポットの特集を組み、映えスポットを巡る周遊モデルコースといったものも発信しているところである。外国人観光客向けに関しては、観光地域づくり担当副部長から御説明差し上げる。

○副部長(観光地域づくり) それでは、インバウンドと呼ばれている訪日外国人観光客のお客様向けに情報を発信している例を説明する。

先ほど説明をした県の観光連盟で行っているキャンペーンというかフォトコンテストの中で使わせていただいた写真というのは、受賞写真以外のものも含めて全部使う許可を県が持っている。希望があれば、いろいろな業者に写真を提供して発信をすることが可能である。最近だと先月14日から全日空のインスタグラムとフェイスブックとツイッターで福井県を紹介する「世界の支店から、こんにちは!」というテーマで発信した例がある。この中で3枚ほどこのフォトコンテストのエントリーの写真を使わせていただいた。これはふくいドットコムのほうから見ていただくとお薦めコースと出ているもので、福井の駅前の写真、県庁の近くの桜の写真、それから足羽川の桜並木の写真、あと7月に発信したので、ぜひ秋に来てくださいというPRの気持ちも込めて養浩館の秋の、少し紅葉が進んだところの季節の写真も使わせていただいた。今、若い方はどこに行こうというよりも、何かが発信されて、それが自分のところに飛んできて、それを見て行くところを決めると聞いている。であるので、グーグルで検索をしたり、あとは誰かから聞いた情報を基にホームページで検索するのではなく

て、自分の携帯に飛んでくるツイッターとかインスタグラムというのが大変有効だと伺っている。

特に外国のお客さんも同じであるが、フィリピンのお客様は物すごくインターネットと携帯電話を活用する民族性があると伺っている。情報源は常にパソコンを持って歩くというよりも、携帯電話一つで何でもできる、そういうところが進んでいるようである。であるので、今後は先ほど御提案いただいたような外国の方向けのフォトコンテストを行って、福井に来てもらった外国の方が自国や違う国に発信するというのは大変有効なお話だと思うので、予算を取るタイミングが年に何回かあるけれども、ぜひ提案をする機会があれば検討したいと思う。

○新幹線開業課長　もう一つ質問をいただいていた高校生を中心とした若者フォトコンテストを実施し、誘客促進の強化を図ってはどうかという御質問に対してお答えをする。

今ほど御説明した県と県観光連盟で実施しているインスタグラムフォトコンテストについては、今年度も来年の3月まで実施しているところである。応募方法は、県観光連盟公式インスタグラムアカウントをフォローしていただいて、基本ハッシュタグ「#私の好きな福井県2023」であるとか「#撮影場所」をつけて投稿するもので、高校生の皆様も参加可能である。第1期が4月から8月までであるが、現在は「恐竜とお城」をテーマに実施していて、丸岡高校の皆さんにおかれてはぜひ丸岡城をテーマに若い感性を生かした写真を投稿していただければと思っている。

このフォトコンテストへの参加は、県や県観光連盟による著作物の利用を許諾することが条件である。投稿作品については、今後、外国人観光客の誘客において積極的に活用していきたいと思っている。

○中嶋委員　県観光連盟の公式インスタグラムがあるとおっしゃっていたが、フォローして下さっている1万人の方は、どのような年代で、どの地域の人たちで、高校生とかはたくさんいるのかを教えてください。



○新幹線開業課長　具体的な細かな数字は持ってないけれども、大体県内の方が多いというふうに伺っている。年代は若者に限っておらず、発信するほうは女性が中心であることには間違いないけれども、10代から40代ぐらいまで結構幅広いというふうに伺っている。

地域に関しては県内が多いということで、県内全域から自分の自慢の観光スポットを発信していただいているところである。

○中嶋委員　私たち高校生がインスタグラムを活用して発信するとなると、そのテーマがあらかじめ決められていると、発信するのにちょっと突っかかりみたいなのができるが、そういうのを取り払うという案みたいなのは今後お持ちか。

○新幹線開業課長 何年かフォトコンテストを実施していく中で、やっぱり少し偏りが出てしまった。要は景色の写真に偏りが出てきた。インスタグラムの内容を充実させるために、昨年度くらいからあえてテーマを絞らせていただいたところである。

今回、貴重な御意見をいただいたので、その制限を取っ払って実施できるように尽力していきたいなと思っている。

○中嶋委員 観光客の方々は様々な体験活動を行うことに大きな魅力を感じているのではないかと考える。私たちの住む丸岡では、織物体験やよろい作り体験に参加し、楽しんでいる観光客の方々を見かけることがよくある。しかし、私たちが調べた「FIRST291～北陸新幹線開業プラン～」では、若者が楽しめる体験が不足しているというデータがあった。福井県には、越前和紙や越前焼、若狭塗箸、細幅織物など伝統的な工芸品が多くあり、観光客の方々は体験や経験を求めているが、福井県にはそのような機会が少ないと感じている。

そこで、福井県に多くある伝統工芸品の創作体験や自然体験などを造成すればいいのではと考えているが、観光誘客への支援や取組はどのようになっているのか、現状と課題について教えてほしい。

○副部長(観光地域づくり) いろんな体験プログラムというのは実際に展開されているけれども、つくっただけでなかなか旅行商品と連動してなくて世の中に出ていないとか、あとはホームページに載せているけれどもホームページに見に来る人が少ないとか、そういうのはやはり配信する予算を取って実施をしている。私のところはインバウンド担当なので、インバウンドに特化するけれども、やはりせっかくいいものをつくっても日の目を浴びなくては意味がないので、そういうことがないようにきちんと満遍なくいろんな媒体に発信ができるように努めてまいりたいと思う。

あとは、ちょうど新幹線開業ということもあるので、10月から北陸新幹線のプレDC—DCというのはデスティネーションキャンペーンの省略であるけれども、これが10月から12月まで展開されるので、うまくそういう機会を使ったり、あとは11月に全国宣伝販売促進会議というのがあるので、こういうときにうまく旅行会社に旅行商品をつくるときに観光素材をきちんと組み込んでいただいて、例えばバスでぐるっと回るようなツアーの中に確実に体験物を入れたり、あとは関連商品を買っていただいたり、そういうものをきちんと提案できるように、旅行会社は1年間のスケジュールを組んでいるので、またそういういい機会を逃さないように、きちんと進めていきたいと思っている。

○篠島委員 先ほど述べたように、個人での農業に外国人は強い興味を持っているのではないかと考える。農業イコール田舎のイメージが強いし、実際それは間違いないと思う。その考えを逆手に取り、農業を押し出し、外国人観光客や都会の方を誘致したらどうか。農業体験が福井県のブランドとして定着していかないかと思う。

若い世代に福井県に来ていただくためには、アーティストやタレントの力を借りることも必要であると考えます。コンサートなどでは、あるお土産屋さんが福井の伝統的

なお菓子とアーティストのコラボ商品を発売しており、たくさんの方が購入している様子がかげえた。県外の方が福井県に来るきっかけになったり、福井の商品をアピールする絶好のチャンスになったりするのではないかと思います。アーティストやタレントの方の影響力は絶大であるので、県としても積極的にコラボしていくことが必要であると思う。



そこで、タレントやアーティストの方々と積極的にコラボして情報発信力を強化してはどうかと考えるが、県の考えを教えてください。

○魅力創造課参事(食文化) 御提案ありがとうございます。

タレントやアーティストの方々とのコラボというのは大変魅力があり、効果も絶大なものと考えている。これまでも、例えば福井県の新しいブランド米いちほまれは、去年はタレントの鈴木福君と誉ちゃんという御兄妹にCMいただき、都内を中心に大変人気が出て、いちほまれの認知度も上がり、大変好評な売行きと聞いている。

また、芸能人の方々に関しては、タイアップというところまではいかないけれども、グルメ番組であったり、旅行番組で福井にお越しただいて、福井の魅力であったり観光地などを発信いただいている状況である。

ただ、皆さんも御存じのように、タレントというのはすごく制限があって、なかなか権利関係が難しいというのもあるし、例えば髪型一つ変えただけで前回撮った写真がもう使えなくなったりとか、なかなか自由にできないというのが現状である。

コストの問題もあるし、県としてはタレントだけでなく、影響力の高いインスタグラマーなどにも福井に来ていただいて情報発信していただいているところである。

タレントではないけれども、同時に絶大な発信力を持つブランドを持っている会社とのコラボレーションも進めていて、例えば世界で人気のあるチョコレートブランドであるゴディバだったり、マカロンでナンバーワンのピエール・エルメだったり、あと駅弁の売上げトップブランドの崎陽軒などとも連携して、例えばゴディバだと3年くらい前から福井のそば、今だと、とみつ金時、福井梅なども使っていただいたり、越前焼、越前和紙などの伝統工芸なども使って一緒に発信していただいている。

崎陽軒では県産食材を使ったお弁当の販売などにも御協力いただいて、そういったところとの連携によって、福井の知名度や魅力の発信などを行っている。

○中嶋委員 福井県で宿泊する観光客が少ないというデータがある。県としてイベントやコンサートを積極的に開催していただいたとしても、宿泊してもらえなかったら効果は半減してしまう。丸岡駅周辺や坂井市内においてもシャッターが下りたままの店舗が多く存在している。新幹線が開業するまでに空き店舗を解消するのかわからないが、空き店舗を利用して宿泊施設を整備してはどうかと考えている。また、整備する宿泊施設は、福井県の伝統工芸品や城内の雰囲気など日本らしさを感じさせるデザインにしてはどうか。

そこで、空き店舗や空き家を丸岡城などの観光地をモチーフにした宿泊施設に改修

するために必要な県の支援について所見を伺いたい。

○副部長(観光地域づくり) 御意見も含めて御質問ありがとうございます。

令和2年から3年にかけて、私ども県がいろんな助成金を使いながら宿泊施設を増やしていくという努力はしてきた。ただ、実際に空き店舗をどう活用するかということまではまだ至っていないけれども、休眠している施設を復活させることによってまちが活性化する。また、宿泊を呼び込む場合は、単に泊まって、夜食べて、朝食べてだけではないし、早朝散歩をしたり、買物に出かけたり、商店街というのはそういうところも含めるといろんな機能を持っているのではないかと思う。また、コンセプトルームという形で恐竜ルームをつくったり、また伝統工芸品を装飾品として用いた部屋、あとはペットと一緒に泊まれる宿を増やすとか、サイクリストに優しい宿ということで宿の中にサイクルステーションをつくったり、サイクルステーションというのは空気入れ、修理するときの工具、スポーツタイプの自転車は駐輪するときにはママチャリのようなスタンドがないのでサイクルステーションに引っかけて乗せないと自転車を止めておくことができない。そういうものを整備したり、あとは実際に自転車が高額であって、良いものになると50万、60万円台がざらにあるため、外に止めておく心配だということで、部屋の中まで自転車を持ち込める施設もだんだん増えてきている。

ただ、そういうことも県が助成をしていかないと設備投資に費用がかかるので、そういうことも含めていろいろな助成金の制度を増やしていけたらと思う。

○渡辺(大)委員長 ほかに発言はないか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○渡辺(大)委員長 それでは、ほかに発言もないようなので、ここで一旦休憩する。再開時間は後ほどお知らせするので、理事者の方は退室を願う。

～休憩～

○渡辺(大)委員長 休憩前に引き続き委員会を開く。非常に中身の濃い、そしてまた皆さんよくしっかり調べてきたなと思う。理事者からも前向きな発言があって、とてもよかったなと思う。

それでは、先ほどの議論を踏まえて、最終の提言書案を作成したいと思う。

お手元にある提言書案について、修正したほうが良いという部分があれば、御発言を願う。

よろしいか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○渡辺(大)委員長 特に修正などはないようであるので、提言書案については、た

だいま配付をしている案のとおり、再開後に申し渡しを行うこととしてよろしいか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○渡辺(大)委員長 特に異議もないようであるので、そのようにする。
ここで、再度休憩する。

～休 憩～

○渡辺(大)委員長 それでは、休憩前に引き続き委員会を開く。
先ほどの議論を踏まえて、県に対し提言書を提出することを決定している。提言書の案はお手元に配付してある。
このことについて、委員より説明をお願いします。

〔各委員、別紙「福井県の魅力・ブランドの発信と高校生のアイデアを生かした観光事業についての提言書」に基づき、説明〕

○渡辺(大)委員長 それでは、説明が終わったので、提言書を提出したいと思う。
中嶋委員、観光地域づくり担当副部長は中央までお願いします。
では、提言書を渡してほしい。

〔提言書申し渡し〕

○渡辺(大)委員長 では、席にお戻り願う。
高校生が自分で考えた心からの意見であり、理事者の皆さんの心に染み込んだと思うので、高校生ならではの考えを施策に取り入れられるところは取り入れていただければと思う。
それでは、提言書の申し渡しが終わったので、以上で議事は終了する。
これで高校生県議会の3233系チームの委員会を閉会する。

～ 以 上 ～



福井県の魅力・ブランドの発信と高校生のアイデアを生かした観光事業についての提言書

本県においては、令和6年春の北陸新幹線敦賀開業に向けて、官民連携によるまちづくりが進んでおり、国内外の人々に対して福井県の魅力を伝え、発展していく大きなチャンスを迎えています。

福井の宝だと思われる、食・風景・伝統工芸などは多くありますが、全国的に知名度があるかという点、そうではないと考えています。「FIRST291～北陸新幹線開業プラン～」では福井県の観光課題として、「お土産や宿泊、若者や大人が楽しめるスポットに関する評価は全国平均より低く、リピーターも少ない」ということが挙げられていました。また、「現地での観光情報」についても低い評価となっています。

他県にも誇れる魅力があるにもかかわらず、それをうまく発信できていないように感じます。高校生等の若者の意見も取り入れていき若者目線や、外国人目線で福井の新たな魅力を発掘し、それを発信していくことが福井県の観光事業の活性化につながっていくと考えます。

そこで、国内外の幅広い世代の人々が楽しめる福井県のあり方を考え、次の事項について提言します。

- 1 外国人目線で魅力発信するために、観光課に外国の方を積極的に採用すること。
- 2 高校生が考案したグルメを観光地で販売しウォークラリー方式で巡るイベントを開催すること。またその様子を撮影した動画のSNS発信および多言語対応による外国人観光客の誘客をおこなうこと。
- 3 国内外の観光客のPRのために、県による、若者を中心とした「いいねフォトコンテスト」を実施し、その受賞作品等をインスタグラム等のSNSで発信すること
- 4 タレントやアーティストの方々とタイアップし、魅力的なお土産やご当地グッズづくりを推進すること。
- 5 伝統工芸品の創作体験や自然体験、農業体験などができる体験型の観光を増やすこと。
- 6 宿泊施設の少ない地域において、空き店舗や空き家を改良し、宿泊施設を増築する。その際、建物や各部屋のつくりを各地域の歴史や産業などの特色を盛り込んだ、福井ならではのものにすること。

令和5年8月1日

福井県知事 杉本達治 様

丸岡高等学校 チーム「3233系」
中嶋 琉亜
篠島 優芽
荒井 沙雪
宗石 愛莉

福井南高校 Mama's Bank Accountチーム 委員会会議記録

- 1 日 時 令和5年8月1日(火曜日)
午後 1時20分 開会
午後 2時20分 閉会
- 2 場 所 第2委員会室
- 3 出席委員 田中宏典委員長、福野副委員長、
西田委員、鈴木委員、内田委員、清水委員
- 4 欠席委員 なし
- 5 議会局職員 書記 吉田企画主査、渡邊主査
- 6 説明員 (総務部)
広報広聴課参事(広聴)
(未来創造部)
県民協働課長
(エネルギー環境部)
エネルギー課長、嶺南Eコスト計画室長

○田中(宏)委員長 ただいまから令和5年度高校生県議会のMama's Bank Accountチームの委員会を開会する。

初めに、注意事項などについて幾つか申し上げる。

まず、発言の際は、挙手をして委員長の許可を得た上で発言してほしい。また、必ずマイクを使用してほしい。発言を始めるときにスイッチを入れ、発言が終わったらスイッチを切ってほしい。

次に、会議中は、パソコン、スマートフォンなどの使用は可能である。ただし、着信音などが鳴らないように設定をお願いする。また、撮影も可能であるが、ほかの人の発言の妨げにならないようお願いする。

次に、本日の出席者の自己紹介に移る。

副委員長から順をお願いする。

〔委員、説明者自己紹介〕

○田中(宏)委員長 それでは、議事に入る。

本日議論するテーマについては、次第にも記載してあるとおり、委員の皆さんに考えていただいているので、まず委員からテーマについて発言をお願いする。また、テ

ーマについて説明者に質問等があれば、併せて願います。

○清水委員 この場に参加するに当たって、まず私たち福井南高校が特に力を入れている探究活動を出発点に、県の予算の使い方について話し合った。その中でも特にクリアランス普及啓発予算について焦点を当てて話を進めていきたい。

私たちの高校では昨年度、クリアランス金属を使った防犯灯を製作した。きっかけは、学校から最寄り駅までの通学路が夜になるととても暗く、特に冬の下校時はスマホのライトで足元を照らしながら帰っているという、先輩たちから代々受け継がれている課題である。実際その道路にはライトはあるものの、農耕地が近くにあるため高い位置にライトが設置されており、日が暮れると非常に暗い。特に降雪期になると田んぼに落ちたり物を落としたりする生徒が必ずいる。しかし、歩道の設置や道路の全面改装を要求するのは現実的ではない。

そこで、私たちは、昨年度本校に設置したようなクリアランス金属の防犯灯を地域に設置することを提案したい。

もちろん地域に設置する上でクリアランス物に対する不安や疑問を持つ方もいることから、住民のクリアランス制度に対する理解促進が必要不可欠であるが、私たちはふだんから探究活動の一環として、様々な場面で地域の方と交流の場を持っている。例えば私が所属するゼミでは、地元文殊山の麓にあるキャンプ場を地域の方と一緒に作り、盛り上げる活動をしている。ほかのゼミでも文殊公民館で高齢者と交流したり、また毎年11月に開かれる文殊やまのぼり大会では、毎年ボランティアとして多くの生徒たちが参加したりするなど、地域を学びのフィールドとして、この地区の人々や環境から多くのことを学ばせていただいている。その交流の延長線上として、クリアランス金属の説明についても、私たちが確実かつ丁寧に行っていくことで、地域の方のクリアランス資源に関する不安にも応えていくことができると考える。まずは交流のある地域から着実に進めていくことで、このクリアランス制度の認知度は少しずつながら上がっていくのではないかと。

私たちは、クリアランス金属の防犯灯設置活動という通学路等の安全・安心の確保とクリアランス制度の理解促進という一石二鳥の取組を、クリアランスモデル事業として進めていきたい。

実際に、学校に設置している防犯灯の写真を撮りに来て、デザインがかわいい、この防犯灯を自分の地域にも設置したいなどとおっしゃる方もいた。このことから、私たちの活動をモデル事業として学校周辺地域に防犯灯を設置していくことで、今後はほかの地域でもクリアランス金属製の防犯灯を設置したいという声生まれ、防犯灯を入りに、広くクリアランス制度の理解が進むのではないだろうか。

また、やみくもにクリアランス製のものを設置するのではなく、原子力発電の是非に着目してもらえない。あくまで通学路が暗いという問題を解決するための手段としてクリアランス金属を活用しただけである。このような経緯から、この活動は資源のリサイクルというクリアランス制度本来の趣旨にも合致しているように思う



が、この活動のモデル事業化について御意見をいただきたい。

また、クリアランス制度の理解促進のために福井県として実施している、または検討している取組があるのか、お聞きしたい。

さらに、福井県内での取組はもちろん、県外に向けての取組についても実施または検討しているものがあれば併せて教えていただきたい。

○エネルギー課長 皆さんのような若い方にクリアランスの理解促進活動をしていただけるのは、我々にとって非常にありがたいと感謝している。特に住民の方にとってクリアランスとはどういうものかということは、若い方の意見だからこそ受け入れやすいという側面もあるので、我々は非常に効果的な活動であると考えている。

防犯灯をつけると通学路も安全になるし、クリアランスの理解促進にもつながり、一石二鳥ということであるが、さらにクリアランス金属を使ってそういう製品を作ると、鉄鉱石から作った場合と比べてCO₂の排出量が4分の1になったり、これを使わなかったら埋立処分となり、埋め立てられる場所がどんどん詰まっていくなど、SDGsとか、脱炭素社会に向けた貢献にも期待できるので、一石二鳥が三鳥、四鳥にもつながる、本当にいい取組なのかなと思っている。

この事業のモデル化ということについては、県としては令和3年度からクリアランスの理解促進を図るために、地域の住民の方を対象にステークホルダーグループ、ちょっと難しいけれども、要はクリアランスを勉強会形式で学んでみんなで理解しようという取組を、嶺南を中心に行っている。こういったところで皆さんの活動をぜひ紹介させていただいて、ほかの地域でも展開できないかといったことについても今後検討していきたいと考えている。

○嶺南Eコースト計画室長 後半の部分について回答させていただく。



クリアランス制度の理解促進のため、県では今ほどエネルギー課長が申し上げたとおり、地元の企業、住民の皆さんと一緒に、ステークホルダーグループで、発電所内のクリアランスの現場を見ていただくとか、クリアランス金属の放射線の測定体験を行う勉強会を行っている。

去年は、国のクリアランスの再利用に関する実証に採択されている県内の企業、それから国や市町と一緒に、クリアランス金属を用いたサイクルスタンド、自転車をかけるスタンドを若狭湾サイクリングルートに沿ったいろんな公共施設に置いてPRを進めているところである。県庁にも今、クリアランス金属で作ったベンチを2脚置いていて、いろんな方の目に触れるような形で理解の促進を図っているところである。

また、今年度は、先日閉会した6月県議会で予算をいただき、こうした取組をさらに拡充していくことで、クリアランス金属を使った新たな製品によるPRとか、さらに皆さんにクリアランス制度を知ってもらうための取組を考えているところである。

県外については、国全体に関わることであるので、そこは国にいろいろお願いしな

がら、どうやってクリアランス制度を社会に定着させていくかということに取り組んでいきたいと思っている。

○内田委員　私たち福井県に住む若者が期待するのは、クリアランス資源が一つの産業として確立することである。そうすることで、地元の企業がビジネスに参入する、若者に雇用が生まれるといった流れがつけられる。若者に雇用が生まれればより魅力的な福井県になり、地元への関心も高まるのではないだろうか。



クリアランス防犯灯を置くメリットはほかにもある。例えば商店街に置くとする。防犯灯を見るために人が集まり商店街が活性化することもあると考える。それだけでなく、地元の高校生がデザインしたということで話題になり、商店街の人が県外の方にその話をすれば、福井県内にとどまらず県外にもクリアランス制度を広めるきっかけとなるのではないだろうか。

そのほかにも、原子力発電所関連施設以外の施設でクリアランス金属を使った製品を設置しているのは、県内の学校では現段階で本校と敦賀工業高校の防犯灯のみである。これを福井県の各地域に設置していくことは、科学的な視点から物事を判断できる高いリテラシーを持った県民性や、県独自の次世代層による取組として外部にアピールできる新たな材料となり、学力の高い福井県としての魅力がさらに補強されることにもつながるのではないだろうか。

長くなったが、福井県としてクリアランス制度の利活用に関して今後のビジョンをお持ちであれば、お伺いしたい。

○エネルギー課長　クリアランスに関する今後のビジョンをどう考えているかという質問だったと思う。

県のほうでは令和2年度に嶺南Eコースト計画を策定している。これは、原子力とか再エネなど様々なCO₂フリーのエネルギーを活用して、地域振興に役立てていこうとするもので、人や企業、資金などを呼び込めるような地域づくりを目指している。その中に4つの大きな基本方針と8つのプロジェクトがあって、そのプロジェクトの1つとして、原子力リサイクルビジネスを立ち上げていこうという構想を持っている。

原子力リサイクルビジネスというのは、クリアランス金属を再利用しているんな製品に役立てていく、要は原子力発電所から出てくる金属をごみとして捨てるのではなく、再利用していこうとするものである。地元の企業を集めて、そういう原子力リサイクルビジネスに取り組む企業連合体を設立し、みんなと一緒にやっっていこうというビジネスモデルである。これについては、国が昨年、共創会議で原子力の立地地域の将来像を考えて取りまとめた案の中にも、この福井県の原子力リサイクルビジネスを国のリーディングプロジェクトとしてしっかり応援していくという国のお墨つきもいただきながら、今、福井県で全国初となる取組を進めている。

もう少し原子力リサイクルビジネスについて具体的に言うと、今、各発電所でクリアランスの作業をばらばらにやっている。そうすると、県内7か所の廃炉があるけれ

ども、それぞれ非効率になる部分がある。それを1か所に集めて除染作業とかクリアランスの測定みたいなものをやるとコストが下がるのではないかと考えている。さらには、今、地元企業は定期検査とかいろんな業務で原子力に携わっているけれども、下請の構造、二次下請とか三次下請というところでの受託になっている。そこで、福井県が中心となって原子力リサイクルビジネスを立ち上げて、できればそれを元請の立場で工事を受注する。そうすると地元の企業への利益配分がしっかり多くなるのではないかといい地域振興の面も含めて、こういう原子力リサイクルビジネスモデルというのを考えている。当然こういうモデルがしっかりビジネスになってくれば若者の雇用も増えるので、地域の魅カアップにもつながるのかなと思っている。

現状では、こういったビジネスを実際に成功させるために、国との調整、協議とか、あと前提としてクリアランス金属が安全だという住民の理解がないとビジネスが進まないの、クリアランス制度の理解促進活動に取り組んでいる。そうした意味で、我々としては皆さんの活動に本当に感謝している。

○内田委員　クリアランス資源を産業化していくためには、この資源を親しみやすいものにする必要があると考える。

そこで私たちが提案するのは、クリアランス資源を、高校生が学校の垣根を越えてものづくりの素材として使う機会をつくるというものである。あくまでもものづくりの素材としてクリアランス資源に触れることで、主体的かつ科学的な視点で制度について学ぶことができる。また、ものづくりって楽しい、クリアランスについてもっと知りたいといった声が生まれると、若い世代の将来の選択肢としてクリアランス産業が含まれることになり、より今後の地域経済に可能性が生まれるのではないかと。これは金属だけでなくコンクリートも含まれる。例えば、学校の敷地に設置できるベンチを作る、ブロック状にしたコンクリートを基に作品を作るなど、高校生の自由な発想で利活用の道を探るきっかけをつくることは、福井県にとっても高校生にとってもメリットがあることではないだろうか。

だが、こういった機会を設けるには財源が必要になってくる。そこで電源三法交付金の一部を活用するのはどうか。この活動に電源三法交付金の一部を使用することで、若い世代のための資金となり、初めに述べた若者の意見を取り入れることにもなる。また、参加者から参加費などを取らないようにすることで、経済的な格差なく、よりたくさんの次世代層がクリアランス資源に触れる機会を増やすことができる。



私たちは、福井県が誇る特徴の一つとして電力があると考えている。目立つものとして原子力発電所があるが、そのほかにも火力、水力、風力、太陽光、バイオマス発電など様々な種類の発電所があり、その発電施設は多岐にわたる。しかし、それを意識して福井県を見ている人はあまりいないのではないだろうか。一方で、私たち福井県民もどうであろうか。恐竜やカニはすぐ出てくるが、これらはいずれも嶺北のものである

り、福井県全体で見ると一体感はないように感じる。

福井南高校で3年間、原子力発電や地層処分について探究活動をして、昨年度卒業した先輩はなぜ福井県の名産品イコール電気にならないのかと話していた。それは福井県だけでなく、全国の発電所立地地域に該当するものだが、私個人はこの発言を聞いてはっとした。この電力生産圏であること、発電所立地地域であることを県内外の人に意識してもらうことで、是非論に陥りがちな原子力発電をめぐる意識が変わるのではないだろうか。当たり前にある電気の供給を意識することで、節電やSDGsを始めるきっかけになるのではないだろうかと私たちは考える。そのきっかけづくりを福井県から、また私たち高校生から始めたい。

福井県としては、これまでもエネルギーを地域振興の中核に据える取組を進めてきたと認識しているが、今後はどのような計画を持っているか。

また、電気を県外へPRしていく必要があると考えているか、お聞かせいただきたい。

○エネルギー課長 エネルギーをどのように地域振興につなげていくかという今後の計画という点と、福井県名産の電気をどのように県外へPRしていくのかという2つの御質問だったと思う。

まず1点目の地域振興に関してである。先ほど申し上げた嶺南Eコースト計画を令和2年度に策定しているけれども、この中には地域振興に関する様々な計画が含まれる。

主なものを3つ挙げさせてもらくと、1つは原子力である。嶺南地域で一番発電量の多い原子力をどう地域振興に生かしていくかということで、原子力関係の研究とか、人材の育成に取り組んでいる。例えば国際的な原子力機関のIAEAというところがあるけれども、そこと覚書を結んで福井県の嶺南地域に国際会議を誘致したり、あとはいろんな国の研修生を嶺南地域に招いて研修事業をやったりしている。当然、発電所がいっぱい動いているところであるので、そういった現場も見ながら海外の人に研修してもらうことは、福井県の特徴の一つとして地域振興に役立っているのかなと思う。そういう方が来られるところに県内の大学生の方も参加して、国際的な原子力の議論とはこういうものかというのを学べるような仕組みをつくっている。

地域振興の2つ目は、先ほど申した原子力リサイクルビジネスである。これについては、今後どれくらいの費用でどういう原子力ビジネスができるかとか、今後調整する課題はどのようなものがあるかというのを検討している最中であり、ひいては嶺南の企業に参加していただき、企業の受注アップに努めたい。

3つ目は、スマートエネルギーエリアとかスマートタウンである。これはお住まいを再エネとかCO₂フリーの電気を利用してブラッシュアップしていこうというもので、どういうことかということ、家庭に太陽光や蓄電池、HEMSという設備を導入すると外からの電気がなくても自分のところの発電量だけで生活が賄える。そうすると災害にも強いし、停電になっても自宅だけは停電にならない。そういったおうちの集合団地をスマートタウンみたいな感じで考えている。あと、最近だと不審者がいると反応するAIの見守りカメラなど、ICTを使って安全・安心なまちづくりをスマートタウンとして進めている。

そういった形で、原子力、再生可能エネルギーを活用した地域振興を計画的に進めているところである。

2点目の福井県名産の電気を県外へPRしていく必要があるのではないかとしたことについてである。

これについては、福井県でのCO₂フリーの発電は原子力が一番大きく、あとは太陽光とか風力もあるけれども、福井県全体でのCO₂フリーの電気供給量は340億キロワットアワーであり、見当がつかないけれども膨大な電気を生産している。片や福井県が消費している電力は77億キロワットアワーで、大体使っている電気の4倍ぐらい生産している。ということは、福井県がCO₂の削減に4倍以上貢献している。福井県はこれだけCO₂フリーの電気を供給しているが、大消費地の方はそういうことを、福井県はそんなにすごいのかと分かってもらえないところがあるので、こういったことを見える化して全国にPRできるような仕組みづくりを国に要望しているところである。

それと、PRの手段としてはもう2つぐらいある。原子力発電所の周辺地域の住民の方には電気料の補助制度が設けられていて、立地地域で協力していただいていることに対して電気料のメリットがあるというところをPRしている。あと、企業誘致の際に、新しい企業が立地地域に来られる場合には電気料が安くなったり、原子力だからクリーンなエネルギーを利用している地域であるということもPRして、地域振興につなげる取組をやっている。

今後とも、こういうCO₂フリーのエネルギーの名産地であるということ県内外にPRして地域振興につなげたいと考えている。

○鈴木委員 先ほど話したように、私たちは高校生や若い世代が福井県に興味を持つ人口を増やしたいと同時に、将来何かあったときに、知らない、分からない、自分の



のことはないと他人事で誰も問題を解決できない状態ではなく、一人一人が主体的に考え、意見を出し、自分事化できる県民性を形成していきたい。そのようなきっかけの一つとしてクリアランス資源の活用があるのではないだろうか。高校生でも福井県のことを考えられる機会があれば、私たちが目指す福井県を考える、つくるきっかけを増やすことができる。

現在、福井県では、ふくい若者チャレンジ応援プロジェクトをはじめ様々な施策を通してこの部分に注力されているが、個人の意思を応援するだけでなく、同じ志、例えばさきに述べたようなクリアランス金属のリサイクルをはじめ、県としての課題や施策について、高校生や若い世代が地域や学校の垣根を越えて県と次世代層とが一緒になって取り組むことができるような制度をつくる計画があるかどうか、お伺いしたい。

○県民協働課長 県の課題や施策について、高校生などの若い世代の方と県が一緒になって取り組んでいくような仕組みについてのお尋ねかと思う。

県の重要な課題については、例えば福井県長期ビジョンであるとかふくい観光ビジョンのように、施策の大きな方向性を定める計画を策定している。この計画に基づき、様々な具体の施策を進めているところである。



こういった計画の策定に当たっては、例えば大学の研究者、関係団体、あるいは学識経験者などで組織する審議会を設置して、その中で専門的な意見を伺う。このほかに、県議会での議論、意見とか、あるいはパブリックコメント制度というのがあり、ここで幅広く県民の方から意見をいただくような場を設けていて、こういった意見を踏まえて計画をつくっている。

我々県民協働課においても、同じく福井県県民社会貢献活動推進計画——若者のボランティア活動とか、そういった活動を進めていくという計画をつくっているところであり、今年3月にこれを改定した。このときにも審議会を開いているが、そのほかに福井大学の学生さんとか、あるいはボランティアを行う学生団体の方と、別途ワークショップとか意見交換を行い、実際にボランティア活動を進める方の意見も聞いて、その上で計画をつくったところである。

この計画に基づき、県民協働課でもいろんな事業を行っているところであるが、例えば、地域の課題を解決して福井県の活性化を図るための事業プランを応援するという県民ワクワクチャレンジプランコンテストを令和元年からずっとやっている。いろんな意見を受けて、これまでは、対象年齢を18歳以上としていたが、今年度は高校生まで拡大し、また、学生枠を別途設けて優先的に採択するように、若者の支援をさらに強化していくことを進めている。まだこの事業は始まっておらず、今月中頃から募集しようとしているので、よければ皆さんにも参加いただけたらと思う。

○西田委員　最後に、自分も含めて私たち高校生などの若い世代は、上の世代に比べて福井県に対しての興味が薄いように感じている。実際に友人や同級生などの中には進学や就職を県外で考えている人はとても多い。また、ここ最近の本校の進学先も多くは県外である。一例として、昨年度の本校の大学進学者は19人、このうち半数以上の11人は県外に進学した。

福井県として地元定着やUターンを促進するために様々な施策を実施していることは理解しているし、大変いい取組だとも思っている。このような卒業後の取組と併せて、地元に住んで学校に通っているうちに福井県に対して愛着を持ってもらう施策も必要であると提案したい。具体的には、昨年度私たちが行ったクリアランス金属を用いた防犯灯製作や普及促進活動について、今後は特定の高校だけではなく、県内の高校生や大学生から活動したい人たちを広く募り、将来的には福井県の次世代層による共通の取組としていきたい。

もちろん、人口の割合的に高齢の方の意見が優先されることや、各地域団体が行っている政策には若い世代の意見も反映されているかもしれない。しかし、若い世代の人がこれからの福井県を支えていくんだと考えるようになるきっかけとして、県全体

の取組に意見を出せるような構図をつくっていただきたい。しかし、そういった構図をつくっていただいたとしても、実際に若い世代がそういった機会に積極的に参加しなければ意味がない。そこで、私たち高校生から積極的に県の政策や活動に参加する流れを生み出していきたい。

そこで、改めて県の政策や取組、予算案に福井県の次世代を担う若い世代の意見をどう反映させているのかについてお伺いしたい。

○広報広聴課参事(広聴) 県民からの意見、提案については、杉本知事就任以来徹底現場主義——現場の課題は何か、それから課題解決に向けて何をしていくべきかということ把握した上で仕事を進めていくという考えを掲げて、知事を先頭に職員一人一人が、地域、企業などの現場に直接出向く「現場でトーク」というものを実施して県の施策を説明するとともに、参加された皆様との意見交換やアンケートによる意見聴取などを行っている。

特に県が実施する様々な事業に対して、本県の将来を担う高校生などの若い世代の皆様に関心を持って参加していただくことは、県政を推進していく上で重要であるので、「現場でトーク」は高校生、大学生を相手方としても実施している。高校対象としては、令和4年度の実績で11回、約900人の生徒さんに対して、来年春開業する北陸新幹線であるとか、成年年齢引下げに伴う消費行動の注意点、それから選挙等に関するテーマで「現場でトーク」を実施しているところである。

こうした機会にいただいた皆様からの意見や提案について、事務事業の見直しや予算編成に適時に反映させていくことが重要であるので、随時、施策のバージョンアップや見直しを重ねていけるようにしてまいりたいと考えている。

○西田委員 質問であるが、「現場でトーク」の機会に出された意見に対して、具体的に何か県の予算等に盛り込まれた案とかがあったら教えていただきたい。

○広報広聴課参事(広聴) 高校生を対象とした「現場でトーク」では、意見、提案というよりは質問というところが大きいのが実情ではあるけれども、過去に行われた「現場でトーク」では、例えば伝統的工芸品に対して、値段が高いことから、手に届く値段の物を販売してはどうかという意見があって、手頃な価格帯の新製品開発を支援する事業を新たに立ち上げたという事例がある。

○福野副委員長 今回の6月議会で「クリアランス制度」普及促進事業が通ったわ



けであるけれども、冒頭の質問でクリアランス品を使った防犯灯をぜひ作りたいという話があった。私も高校生の質問を聞いていて、こういったことが実現するのであれば、県にとってもPR活動としてすごく有効なのではないかと思っている。

先ほどエネルギー課長の話の中で、この福井南高校の活動を紹介したいと言っていた。もち

ろんクリアランス品ということで地元の理解を得ることが大前提であるけれども、それをクリアした際には、ぜひともこういったところにお金を入れていただいて、防犯灯製作という福井南高校の取組と一緒に乗っていただきたいと思っている。

もし意見があったら答弁をお願いします。



○エネルギー課長 先ほど嶺南Eコースト計画室長のほうから説明があったけれども、6月議会で「クリアランス制度」普及促進事業を承認いただき、これからどういう事業にするか考えていくところである。その中で福井南高校の取組は、我々の事業目的に合致しており、我々も本当に心強い取組だなと思っている。今後検討する今年の事業の中で、こういったコラボレーションができるかというのを考えていきたいと思う。

特に来年度は新幹線が来て、県外の方が嶺南地域を含めて福井県にいっぱい来られるので、ぜひ人目につくところにそういうクリアランスのPR製品を置いて、県内外の理解促進につなげていきたいと考えている。また皆さんの協力をお願いしたいと思う。

○福野副委員長 今日お集まりいただいている高校生は2年生であるので、ぜひ卒業までには実際にそういった防犯灯ができたらいいなと思っているので、どうぞよろしくをお願いします。

○田中(宏)委員長 クリアランス金属の関係については、地元でも今後しっかり進めていきたいということであった。既にいろんな事業をしているところも目をつけてやっておられるので、防犯灯だけではなく、しっかりと続けていってほしいと思っている。

先ほどの「現場でトーク」の話の一つだけ聞きたい。県から高校へアクションをかけてそういった事業を実施されているのか、高校のほうから知事と話してみたいというふうに申込みが来るのか、実際はどうなのか。

○広報広聴課参事(広聴) 「現場でトーク」については、特に高校に関しては高校から県に依頼がある。知事というよりは担当課の職員が出向き、そこで事業の説明をして意見交換をするという形で行っている。

○田中(宏)委員長 すごくいいことである。高校生の皆さんもできるだけそういったことに関心を持っていただいて、なかなか授業で忙しいとは思いますが、県にどんどん意見を出してもらってもいいのかなと思う。ぜひこれからの取組の中に生かしていただければと思うので、よろしくをお願いします。

○西田委員 質問というか疑問である。この嶺南Eコースト計画は、多分、嶺南が原子力発電所とか、エネルギーに関していろいろな取組をしているというところから

だと思うが、こういうのを嶺北と一緒にすることはないのかなと思った。教えていただきたい。

○エネルギー課長　私は昨年、敦賀の嶺南Eコースト計画室で、今の嶺南Eコースト計画の仕事をしていた。嶺南Eコースト計画というのは、原子力立地地域の嶺南を中心に、原子力を活用した地域振興とか、再エネ、水素の普及みたいなものをどうやって進めていくかを考えている。

県全体としてどうしていくかというところは県庁自身も問題意識を持っていたので、今年エネルギー課となったのは、嶺南地域だけでなく、県全体として再エネの普及とかエネルギーを活用した地域振興をどうつなげていくかを考える上で、嶺北も嶺南も一緒に取組を進めていこうということで、我々の課がつくられた。まずは先行している嶺南の取組を嶺北のほうにつなげていくといった形で、どんどん県全体のエネルギーの活用、地域振興を図っていきたいと考えている。

○田中(宏)委員長　ほかにないか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○田中(宏)委員長　ほかに発言はないようなので、ここで休憩する。再開時間は後ほどお知らせする。理事者の方は退室願う。

～休憩～

○田中(宏)委員長　休憩前に引き続き委員会を再開する。

それでは、先ほどの議論を踏まえて、最終の提言書案を作成したいと思う。

お手元にある提言書案について修正したほうがいい部分があれば、発言を願う。

〔「修正なし」と呼ぶ者あり〕

○田中(宏)委員長　それでは、特に修正等はないようであるので、提言書案については、ただいま配付している案のとおり、再開後に申し渡しを行うこととしてよろしいか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○田中(宏)委員長　特に異議もないようであるので、そのようにする。

ここで、再度休憩する。再開は14時15分とする。

～休憩～

○田中(宏)委員長　休憩前に引き続き委員会を再開する。

先ほどの議論を踏まえて、県に対し提言書を提出することを決定している。提言書の案はお手元に配付してある。

このことについて、委員より説明をお願いします。

〔各委員、別紙「クリアランス資源の普及に関する提言書」に基づき、説明〕

○田中(宏)委員長 説明が終わったので、提言書を提出していただく。
西田委員、エネルギー課長は中央までお願いします。
では、提言書を渡してほしい。

〔提言書申し渡し〕

○田中(宏)委員長 席のほうへお戻り願う。
提言書の提出が終わったので、以上で議事は終了する。
これで、高校生県議会のMama's Bank Accountチームの委員会を閉会する。

～ 以 上 ～



クリアランス資源の普及に関する提言書

私たちは原子力発電所の廃炉作業で生まれるクリアランス資源を普及させていきたいと考えている。廃炉作業の進行やリサイクルという観点からも、制度周知のための活動やクリアランス資源をより身近に感じることができる取り組みについて考えた。加えて、クリアランス資源をきっかけに次世代層が福井県にこれまで以上に興味や愛着を持ってもらえるような取り組みについて考えた。

それらのことについて、以下のとおり提言する。

1 クリアランス資源の利活用を通じた産業の創出

リサイクルという点から SDGs の目標に合致するとともに、全国に先駆けたクリアランス資源の利活用が県民の誇りにもつながることから、福井県が中心となってクリアランス資源の利活用を広め、地域経済の活性化を図ること。

2 高校生を対象としたものづくりの場の提供

クリアランス資源の利活用にあたっては、クリアランス素材が生活の中に馴染み、より身近なものになるとともに、福井県全体の探求心や学力の底上げにもつなげていく観点から、高校生が地域や学校の垣根を超えて「ものづくり」の素材として使う機会を創出すること。

3 電源三法交付金の使途

福井県、特に嶺北地域に住む次世代層に対し、電源立地地域における交付金の意義や利益の享受に関する意識醸成を図るとともに、地場産業として電力を意識する契機とするため、上記 1、2 の活動に対し電源三法交付金の一部を使用すること。

4 “電気”の PR 材料化

全国最多の原子力発電所が立地し、国策であるエネルギー政策を担う県としての誇りを県民に意識づけ、「電気」を本県の名産品として県内外に PR すること。

令和 5 年 8 月 1 日

福井県知事 杉 本 達 治 様

福井南高等学校
チーム「Mama's Bank Account」
内 田 春 奈
清 水 虎太郎
鈴 木 葵
西 田 杏 乃

敦賀高校 ONDOツルガチーム 委員会会議記録

- 1 日 時 令和5年8月1日(火曜日)
午後 1時20分 開会
午後 2時37分 閉会
- 2 場 所 第3委員会室
- 3 出席委員 小堀委員長、北川副委員長、
森野委員、森口委員、中田委員
- 4 欠席委員 なし
- 5 議会局職員 書記 福岡主任、荒木主査
- 6 説明員 (交流文化部)
文化課長、魅力創造課課長補佐
(教育庁)
副部長(高校教育)、教育政策課参事(学校施設・DX推進)

○小堀委員長 ただいまから令和5年度高校生県議会のONDOツルガチームの委員会を開会する。

初めに、注意事項などについて幾つか申し上げる。

まず、発言の際は挙手をして委員長の許可を得た上で発言してほしい。また、必ずマイクを使用してほしい。発言を始めるときにスイッチを入れ、発言が終わったらスイッチを切ってほしい。

次に、会議中は、パソコン、スマートフォンなどの使用が可能である。ただし、着信音などが鳴らないように設定をお願いする。また、撮影も可能であるが、ほかの人の発言の妨げにならないようお願いする。

次に、本日の出席者の自己紹介に移る。

副委員長から順をお願いする。

[委員、説明者自己紹介]

○小堀委員長 それでは、議事に入る。

本日議論するテーマについては、次第に記載してあるとおり、委員の皆さんに考えていただいているので、まず委員からテーマについて発言をお願いする。また、テーマについて説明者に質問等があれば、併せてお願いする。

○森野委員　今回、私たちは、文化という観点から質問する。

文化にも様々あるように、伝統文化系のものからポップカルチャーとかサブカルチャーとか、そこに分けて質問するので、何とぞ誠意ある御答弁よろしく願います。

では、まずお聞きする。日本には民謡という曲のジャンルがあると思う。民謡というのは、皆さん御存じのとおり何百年と土着で受け継がれてきたもののことを指すが、新民謡というものもある。これは何百年も前というわけではなく、大正後期から昭和期にかけて、いろいろな各自治体で作られたもののことを指すのだが、よく夏祭りで盆踊りなどかかってくる〇〇音頭とか、そういうのを新民謡と言う。この民謡と新民謡をなぜ分けて考えなければならないかという、民謡だと、福井市であれば「免鳥夜網節」があるし、僕の地元の敦賀市であれば「柴田音頭」とか、鯖江市であれば



「羽根曾」とか「やんしき」とかいろいろあるが、どれも無形文化財に指定されていて、「免鳥夜網節」は福井市の無形文化財になっている。

一方、新民謡のほうを見てみると、どれも文化財にはなっておらず、これは仕方のないことで、作られたのが最近だからという理由であるが、行政の保護

の対象ではないと僕は思っているが、これは本当に僕が思っているだけかもしれないので、新民謡というものについて理事者の方々はどのように考えておられるのか、伺う。

○文化課長　新民謡というジャンルであるけれども、まず民謡というひとくくりでは、県内でも様々な民謡団体があり、そういった団体を通して広く親しまれているところである。

新民謡というジャンル分けをすること自体、私は存じていなかったが、それが保存の対象になり得るのかというところでは、やはり民謡自体、新民謡も含めて、地域で愛されて親しまれて、それが保存継承につながっていくという流れであるので、新民謡だから、歴史が浅いから保存の対象ではないといったようなことは考えていない。それは無形文化財の指定、指定外とにかかわらず、そのように考えている。

○森野委員　新民謡と民謡は、僕には、無形文化財とか関係なく、あまり重要視されていないような気がしていたが、そのような御答弁を聞いてありがたいと思う。

最初に、なぜあまり重要視されていないと思ったかという、先日、福井県で初めて高校生NPO法人ということで県から認証をいただき、またあした、ここ福井に来て法務局へ登記をしなければいけないのだが、「とても敦賀すきすき」という団体を特定非営利活動法人にした。今回、文化について質問させていただくというのも、この団体があったからであるのだが、この団体にNPO法人という法人格を持たせるとき

に一つ言われたことがあった。「民謡とかは好きな人たちだけが集まってやっていけばいいのではないか。だから、県は法人格をあまりあげたがらないんだよね」というふうに言われた。民謡や新民謡に対して、そのような認識なのかをお聞きする。

○文化課長　まず、NPO法人の認可については、県の未来創造部の所管になるので、当課としては、民謡とかは好きな人たちだけが集まってやればいいのではないかとこの点についてお答えする。

県内には、民謡に限らず様々な文化分野で愛好家から成る活動団体がある。地域内の小規模な活動団体もあれば、地域団体を束ねて県域団体として発表会や体験会、指導者の育成であるとか全国コンクールなど、そういった活動をしている団体も多数ある。

団体は、その分野の会員相互の交流、親睦、それから技術向上、担い手育成、地域文化の発信などを目的として活動しているものであり、今おっしゃった貴団体についても、NPO法人設立を契機として、県民にとって民謡がより身近なものになるように活動を少しずつ広げていただいて、エリアや活動数を増やしていきながら、これまであまり関心のなかったような人々に裾野を拡大していただきたいと考えているところである。

一方で、昨年度、県で実施した調査によると、県内の文化団体の活動者数が減少している、若手が入ってこないというような御意見もあり、10年前と比べて減少していると答えた団体は9割近くにまで上っている。高齢化しているというような状況の中で、皆さんのような若い世代の方が新たに団体を立ち上げて活動を始めてくださっていることは非常に頼もしく、今後の活動に大いに期待するところである。

○森野委員　やはり、文化活動に従事する人が少なくなってきた。日本全国どこでもそうだと思うが、そのような状況の中で、県はあまりあげたがらないというのが出てきてしまうのは、それが県全体の認識というわけではないとは思いますが、少し文化に対する軽視というように感じた。文化というものが別に必要ないと思っていらっしゃる方だからそうなるのかなと思うが、僕も最初、そういう方がいらっしゃったときに、そういう人たちには理解してもらわなくてもいいのかなと思っていたが、文化というのは県民、市民たちが全体で守っていくものであるもので、どうしたらそういう人たちにも分かってもらえるかなと考えた。それで資料をいろいろ探していたが、福島県の南地方振興局と公益財団法人ふくしま自治研修センターというところが調査した「人口動態調査研究事業報告書～若い世代の定着促進に向けて～」という資料がある。この中で33.2%の人が「生まれ育ったところに住みたいから」、55.4%の人が「生活する上で安心だから」という理由でまた県内に戻ってきて就職を決めている。これは地元への愛郷心——シビックプライドというが、これがなければこういう結果にはならないのではないかと考えていて、つまりこの愛郷心というものを育むことができればUターン率は増加するということだと僕は考えている。このために国全体として取り組んでいるのが、ふるさと教育なのではないかと思っている。

では、福井県として、ふるさと教育にどのような姿勢で取り組んでおられるのか、お教え願う。

○副部長(高校教育) 本県では、「ふるさと」教育を教育振興基本計画の重点施策の一つに位置づけて、ふるさとへの理解を深め、郷土に誇りと愛着を持ち、地域に貢献する心を育む「ふるさと教育」を積極的に推進している。

小・中学校では、総合的な学習の時間などに、身近な地域の自然や伝統芸能、歴史等に係る体験活動や探究活動を行っている。県では、それらの発表の場として、以下のような取組を行っている。学習成果や伝統芸能を発表する、「福井ふるさと教育フェスタ」、福井の魅力を自分の言葉で論理的に伝える、「ふるさと福井の魅力プレゼンテーション大会」、小学校から高校生を対象に地域の魅力を伝える、「ふるさと福井CMコンテスト」、ふるさと福井への誇りと愛着を育む優れた実践を行っている学校などを表彰する、「ふるさとの学び特別賞」などである。



高校では、各界で活躍されている福井県にゆかりのある方に、「ふるさと先生」として県内の高校で授業をしていただいている。また、地元市町への提言など地域や身近な課題をテーマとした探究学習に取り組むことで、潤いと活力に満ちた郷土づくりに関わる姿勢を育成してきている。

○森野委員 様々なふるさと教育の取組をされていて、福井県は、ほかの自治体に比べて進んでいるほうであると僕は思っているが、ぜひこの中に、伝統芸能はあったが、民謡というのを取り入れていただけないかと思っている。例えば資料館に行って、一乗谷の遺跡も新しくなって、僕もすごく楽しかったけれど、ああいうところに行って勉強することが好きな子もいれば、そうでない子もいると思う。どちらのほうが多いかと言われると、多分そんなに興味のない子のほうが多いと思う。僕はすごく好きなのでいいが、この前も校外学習で、うちのクラスだけがそこに行って先生がバッシングを食らうという、こともあった。

それも重要であるが、先ほど体験というふうに言われていたが、体験というところが僕はすごく重要だと思っていて、僕も越前の紙すきとかも敦賀であるが行ったが、すごく楽しかったし、すごく思い出に残っている。

体験できるものが各自治体に絶対にあるかと言われると、そうではないと思っていて、敦賀で体験というと昆布すきだと思うけれど、全員がしているわけではないし、各自治体に絶対あるわけではないが、新民謡であるとか民謡というのは、どんなに小さな自治体でも必ずある。

平成の大合併などで結構市が集まって、今は福井県に村はないが、上志比村、名田庄村とか村があった時代から、その土地に上志比音頭もあるし、名田庄音頭もある。そういうオリジナリティのある、その土地の風土であるとか文化であるとか言葉であるとか、そういうものを織り込んだ民謡というのが各地にあるので、これをふるさと教育に取り入れることができれば、より児童生徒の印象に残るものになり、また、よりよくなるのではないかと思っている。

実際、私の団体で小中学校に出前授業として教えに行っているけれども、休み時間

を返上してまで教えてほしいと来てくれる子もいて、やはり何か楽しんでやってもらおうという経験は一生忘れられないものになると思うので、そこにぜひ民謡を取り入れてもらえないかと思うが、いかがか。

○副部長(高校教育) ふるさと福井への誇りと愛着を育成するためには、郷土の先人や歴史、自然、伝統・文化、産業等を学ぶとともに、地域の自然や人、文化等と関わる活動を通して、地域の魅力に気づき、県民全体で理解を深めていくことが重要であり、民謡もその一つだと思う。

民謡の貴重な体験活動は、郷土芸能部などの部活動を含め、教育活動全体で行うことが大切であると考えます。そのため、まずは敦賀高校で現在行われている民謡の活動を学校祭などの機会を通じ、生徒と教員だけではなく、保護者や他の地域なども巻き込むことでさらに盛り上げてもらい、民謡旋風を巻き起こしてほしいなというふうに思っています。

○森野委員 今まで本当に何もなかった民謡だったが、この活動を去年から始めて、少しは民謡に興味を持ってくれる人も増えてきたのではないかと思っているが、なかなか市民の団体だけでは受け継ぎにくいところもあり、やはり県に音頭を取ってもらい、一つ太い柱をつくってもらえると、こちらとしてもすごくありがたい。ふるさと教育とか総合的な学習の時間というのは、各学校の采配になってきて、やるところとやらないところも出てくると思う。ここの学校はやっていて、ここの学校はやっていないというふうになるより、ある程度一つ道を通していただく。もちろんこちらも頑張るが、行政側としてもそういうのがあると、オリジナリティがあるのはいいとは思いますが、どこかまとめて音頭を取ってもらえると、すごくありがたいと思うが、いかがか。

○副部長(高校教育) 民謡の体験活動を県内各地の学校に展開する有効な支援策を関係機関や団体に相談させてもらおうと思っっている。

○森野委員 ぜひ積極的に取り組んでいただけると、後継者不足と言われているところでも愛着心が湧いて戻ってくる人も増える。これは県にとってすごくプラスだと思うし、文化を継承する側にとっても、そういう機会があり、そしてやる人も増えるというウィン・ウィンな関係になると思うので、ぜひ前向きに取り組んでほしいと思う。

そして昨年度、「福井の方言愛着ましましプロジェクト」というのがあったかと思う。その中の高校生が作る方言辞典で、私、編集長を務めていた。ぜひ来年度は、民謡の年とか、何かそういうのをしてほしいと思っっている。福井県は5回連続幸福度ランキング1位という大変名誉ある肩書きをいただいているけれども、1点だけ大変低い分野があっ、それは文化の分野である。ほかのところは一桁台で全国的にも高い水準なのに、文化だけは四十何位という不名誉なところであるが、文化はいろいろあるので、方言とか食文化、民謡とか、そういう文化の中でテーマを選んでいただいて、県はどうしても単年度ごとの計画になると思うので、今年は何々の年にするというよう

な毎年いろいろな文化に触れていただく機会をつくるという、そういうことができないかと考えている。これはすごく面白くて、全国的には珍しいと思うが、いかがか。

○文化課長 民謡は、委員がおっしゃったとおり多様で多彩な文化の一つでもあるし、重要な一つの誘客コンテンツにもなり得るものと思っている。であるので、まず貴団体を中心にして、より広く県民にとってもっと身近なものになるように広がっていくようプロジェクトを進めていただく。それを我々県が応援するといったような形も考えられるので、まずはより広く活動を広めていっていただきたいと思っている。

○森野委員 去年は津田寛治さんが「おもてなし担当知事」ということで就任していただいて、方言辞典を作ったと思うが、参加している高校生の方たちを見てみると、すごく楽しんで、今まで自分たちが気づかなかったようなところに気づけている。しかも、この方言の辞典もある程度まとめられている分野であり既にお堅いものがある。であるが、民謡とか、ほかにもいろいろ分野がある中で、なかなかまとめ切れていないところ、例えば民謡であるとかもすごく膨大な数があるので、なかなかまとめられない部分かと思うが、そういうところを高校生がやりに行く場をつくってもらえるとか、それを民間の団体と協力してできるというのはすごく面白いかなと思う。例えば、僕は敦賀でやっているが、敦賀市でそれをやるのは結構ハードルは低いかと思うが、福井県全体でとなると、なかなか難しく、時間がかかってしまうと思うので、福井の方言愛着ましましプロジェクトのような形をつくってほしいと思っている。

幸福度ランキングについては、先ほど話したが、NPO法人の指標というのも一つ入っている。ここがすごく一番低いところだったと思うが、先ほどのお話を聞くと、どこかNPO法人の設立というところに何か壁を感じる場所があって、民謡系でNPO法人にしたのも福井県初だということで、何か壁をすごく感じてしまうところがあるけれど、いかがか。



○文化課長 NPO法人の認可そのものに関しては、未来創造部の所管になる。

ただ、いろいろとハードルの高い法人格を有する団体というのは、私どもも法人化によってのメリットがあると思うので、既に文化団体は多数あるが、そのメリットをそういったところにお伝えして行って、少しでもNPO法人格のある団体が増えていけばと思っている。

○森野委員 いいアイデアも潰れてしまうのではすごくもったいないので、ぜひそういうのを発信していただきたいと思う。

そして少し話は戻るが、まず各自治体の新民謡の状況を知っておられるか。例えば、踊っているかどうかであるとか、音源がしっかり残っているかどうかであるとか、どんな種類があるか、そういうものである。

○文化課長 残念ながら、森野委員がおっしゃったように方言ほどそういった情報がまとまったものがない。民話にしても民謡にしても、特に新民謡のジャンルであると、なかなかまとまったものがない状態であるということは認識している。

○森野委員 実際に私、各自治体の教育委員会であるとか文化課に電話をかけて、どんなものがあるかを調べたところ、レコードはしようがないが、音源すらないという自治体もある。

ここであえて名前を出すのが、池田町は持っていないと。最初は「そんなのない」と言われたが、調べていただいたら「あるそうだ」と言われた。今はもうどこでも踊っていないし、曲が流れる機会もないという。「池田追分」はたしか県の無形文化財であったかと思う。それはしっかり踊り継がれているが、せつかく1973年に作って、それ以降踊らず、税金で作っていると思うので、それがすごく悲惨な状態になっているのは、すごく音楽好きとしても悲しいし、文化を継承していこうという者としても悲しく思っている。

このような状況になる前に、各自治体から、新民謡はどんなものがあるかとか、そういうのを収集してもらうことを県主導で行われてはいかがか。

○文化課長 指定文化財に限らず、文化財は民謡を含めてであるが、収集の方針など、地元の自治体の方針を計画として取りまとめている。既にそういった計画を策定しているのは、小浜市であるとか若狭町、坂井市、大野市、勝山市、越前市といったようなところが、伝承していく、保存されていくべき地域の文化、文化財をどのようにして保存して継承していくかということをもとめている。

地元を中心としたそういう計画の下、活動していく。県の立場としては、そういった活動を応援していく、そのように考えている。

○森野委員 これをなぜ今回質問しようかと思ったかということ、幾年か前に県内の校歌を集めておられる。これは県の教育博物館か何かに使う予定で集められたものだと思うが、全部リストアップしたところ百十何曲、各自治体にある。これが今聞けるかということと本当に分からないかと思っていて、各自治体で、敦賀市なんかはもうやっていないし、ばらつきがある。大野市などは僕のイメージで言うと、そういう民謡の活動が盛んなのかと思っているが、各自治体ばらつきがあつて、それを県が応援するよと言いながら、やる気がなかったら集まらなくて、なくなったというのはすごくもったいない話かと思う。新民謡については、僕はほとんど調べてある。なので、ぜひ一緒にやってもらえたらありがたいなと思っている。

今、コロナ禍も明けて、お祭りも始まり、民謡というのも、盆踊りはメインイベントなので盛り上がりつつあると思うので、今のうちに情報を集めて、レコード、音源もしっかり集めて、しっかり保存する。何かそういうことを県主導でやってもらわないと残るものも残っていかないんじゃないかなと思っているので、これはぜひ急ぎでお願いしたいと思う。民謡博物館を造れとまでは言わない。保存してもらうだけで十分であるので、ぜひよろしく願います。

令和6年春には敦賀まで新幹線が開通する。僕は福井県が大好きなので、もっと知

っていただきたいと思っている。そのために様々な政策、施策を進められているかと思うが、やはり東京のディズニーランドとか大阪のUSJとか、ああいうものには、まず勝つ必要がないと思っている。やはり福井の言葉であるとか文化であるとか食文化、風土とか、そういうものは東京などよりも断然あると思っている、嶺北と嶺南で言葉も違うし、文化も全く違う。なかなか文化の点で見るとすごく面白い県であるので、ぜひ福井県を文化の県として盛り上げてもらい、そのための一つとして民謡、新民謡もしっかりと大切にしてもらい、これから文化を盛り上げてほしいと思う。要望である。

○森口委員　引き続き、サブカルチャーとポップカルチャーについて質問する。

まず初めに、理事者の皆様は、サブカルチャーというものは御存じか。この中でも近年人気を博しているライトノベルについて説明する。

「ライトノベル完全読本」(日経BP社)によると、ライトノベルは、表紙や挿絵にアニメ調のイラストを多用している若年層向けの小説というものを指す。なぜ今回このサブカルチャーについて注目したかという、近年、サブカルチャーを用いた地域振興や経済効果をなす事業などが日本各地で盛んに行われているからである。

その一つが、アニメツーリズムというものを活用した、いわゆる聖地巡礼。舞台になったところやアニメのキャラクターが出ていた場所などに、実際に自分たちが行くという、静岡県の事例がある。今年の2月23日配信のウェブ版静岡新聞の記事によると、「ゆるキャン△」というキャンプのアニメがあって、それとのコラボで



「デジタルスタンプラリー、経済効果は4億円超 県内推計」という記事があって、実際に人気アニメーション「ゆるキャン△」とのコラボレーションで2021年度に実施した県主催のデジタルスタンプラリーについて、県内での経済波及効果が4億1,148万円に上ったとする推計を発表した。実際に県外から6,000人を超える観光客が来県して、この事業が静岡県の新たなイメージの定着やPRに役立っているのではないかと考える。

また、同じ「ゆるキャン△」の聖地でも、山梨県もその舞台となっているが、山梨県でも大きな経済効果を生んでいるという状況がある。

福井県には、近年だとライトノベル、福井出身の作家、裕夢先生が書いた「千歳くんはラムネ瓶のなか」などといった福井が舞台となった有名な作品等がある。これらは実際に各関係市町で様々な事業に取り組んでおられると思っているが、福井県全体として、サブカルチャーに関連した事業というものはどれぐらいの経済効果が出ているのか教えてほしい。

○文化課長　経済効果をはかるまでにまだ至っていないが、福井県では、まずサブカルチャーの中でも、特にアニメとかコスプレとか、そういったポップカルチャーは、全国から若い方々や観光客を呼び込むことができる重要な誘客コンテンツの一つと考えているところである。

そこで、昨年度から、トライアル事業でサブカルチャーを活用して町なかのにぎわい創出を図るための事業を開始したところである。本格的にまた今年度から予算もつけて拡大していく予定であるが、令和4年度については、町なかでのコスプレイベントを民間団体とともに開催している。令和5年度は、当初予算でこの事業に300万円を計上しているところである。内容は、全国から参加するコスプレイヤーの方々が、これは福井市を中心としてモデル的に実施するのであるが、町なかや文化施設といったところを周遊できるエリアを設定して、このエリア内でコスプレをした方を撮影できるコスプレ撮影会を開催した。また、声優によるトークショー、コスプレのメイクの勉強会、コスプレファッションショーなどのステージイベント、こういったものもやっていく予定である。

○森口委員 実際、県内でもこのように様々な事業が行われると思う。経済効果も一定程度出ていると考えるが、もっと発展させることは、可能だと思っている。

福井県を題材にしたサブカルチャーの作品の中には、実際に福井がモデルとなっている場所が多くある。しかし、具体例を挙げると、「チア☆ダン」とか「ちはやふる」であるとか、「2.43 清陰高校男子バレー部」であるとか、アニメにあったような作品などは、いわゆる学校ものと言われるものが多いと思う。

先ほど述べたように、実際、「チア☆ダン」は福井商業高校がモデルとなっていて、県内の県立高校である。ファンとしては、実際現地に赴いて、モデルになった場所に行きたいと思っているファンもいると思うが、ふだん入れないような場所である学校というところで、ファンに向けてのイベントが開催されれば、今まで以上の大きな経済効果を出すと思うが、いかがか。

○教育政策課参事(学校施設・DX推進) 聖地巡礼に来た人、こういった人に学校を開放するというようなことができないかということであるが、まず皆さんの福井を舞台にしたサブカルチャーを通じた情報発信への思い、すごく伝わり、県としてはとてもありがたい、うれしく思うところである。

今のところ、モデルになった高校、福井工大福井や藤島、高志、福井商業、いずれのところでも開放したというような事例はなかったが、聖地巡礼ということで、学校を開放する場合、学校に限っての話ではあるが、そのときに課題が生じて、来る人はみんないい人ばかりとは限らない。時には不審者がいたり、目的を偽って来るような人もいないとは限らないので、学校自体、生徒の皆さんが活躍する場であるので、安心していただけるように、そういった場を守るために、警備や施錠など、しっかり受入れ体制を整えてやっていく必要があると思う。

ただ、全国的に見ると、他県の学校で、事前に申請すれば、校舎に入らない、あと、人を写さない、個人情報撮らない、こういったことを条件にして特別に敷地内の見学を認めているという事例がある。

新海誠監督の2007年の「秒速5センチメートル」、まだ「君の名は。」などで売れる大分前の話だと思うが、その聖地になっているところが種子島にあり、電話をかけてみたが緩い感じだったので、福井とは少し様子が違うのかなというふうには感じた。そういったところで認めている事例もあったので、まずは生徒の皆さんの安全確保が

一番大事であるが、どんなことをして許可したのかというのを聞いてみて、同じような対応ができないかというのを、一番に学校と相談しないとイケないが、学校と相談して研究していきたいと思う。

○森口委員 実際、不審者対策などいろいろあると思うが、自分の感覚の中では、福井県は、行政が絡んでアニメやライトノベルなどを活用して福井県をPRすることは、やはり弱い気もする。実際にファンとしては、モデルになったところに行くのを体感できるというのは、ファンにとっては大変喜ばしいことである。今後もアニメツアーリズムといった他県の事例を活用して、福井県もPRを行って行って、さらに福井県の文化を盛り上げて行ってほしいと思う。

そして、ファンの方々に来ていただくだけでなく、サブカルチャーの作品となっているモデルのスポーツや競技、例えば「清陰高校」だったらバレー部だったり、「チア☆ダン」だったらチアダンスだったりという中で、サブカルチャー作品のテーマとなったスポーツや競技などを福井県で開催し、選手たちが福井に来て、一つの大会を開くようなものをすべきだと考える。

福井県として、今後ぜひ誘致または開催を行っていただきたいと思うが、いかがか。

○文化課長 森口委員が御提案していたような全国大会については、県としても事例があり、あわら市で毎年、全国女流選手権大会が「ちはやふる」を契機として毎年継続して開催されている。これは、全日本かるた協会と福井県かるた協会、そこにあわら市が協賛するような形で毎年開催しているものである。これが東京オリンピックの開催に合わせて世界大会にまで発展して、あわら市において「ちはやふる」を契機とした世界大会も開催されたところである。世界大会に関しては、福井県も負担金という形で応援もしているところである。

こうした全国大会に多くの選手の方々があわら市にやってくるわけであるが、このやってこられた方々に聖地巡礼を促すといったような形で、あわら市の観光の所属が担当してやっているところである。

御提案のようなサブカルチャーにちなんだ全国大会は、継続開催することによって、地域振興、観光振興につなげていくといったようなところは、継続を考えるとやはり地域に根差した民間団体が主体となって実施することが望ましいと思っている。

県としては、そういった民間団体が主体となって文化活動に対してこういった大会を誘致して、観光誘客につなげていこうとこういった取組にも助成する、または文化アドバイザーといったような方を派遣して、より大きな取組にしていくなど、そういった応援をしているところである。県と連携しながらよりよい効果を出していけるように進めていきたいと思っている。



○森口委員 先ほど森野委員の質問でもあったように、行政の事業は単年度で終わってしまうと思う。そういうものは2年、3年しないと効果が出ないものだと思うし、

北陸新幹線などがきっかけで、福井県に観光客も多く来ると思うので、このような民間の事業があったら行政にも積極的に支援をしてほしいと思う。

サブカルチャーの作品を通じて福井県を知る人も出てくるとし、ファンであれば、作品の聖地だったらお金もかけるし、情熱もかけるような人々もたくさんいる。福井県もすばらしい作品が多くあるし、まだヒットしていないけれども、これからヒットするであろう作品だとか、人材育成や、県として市町横断型での支援をしてもらい、県全体で盛り上げてほしいと思う。

○中田委員 では続いて、音楽についての質問をしたいと思う。

私は、まず音楽は、まちをととも明るくするものだと思う。私自身、すごく音楽を聞いたり演奏したりすることが好きで、町なかに音楽が流れているだけで雰囲気ガラリと変わると思う。音楽が町なかにかかっていることで、どういうふうに影響するかというと、音楽というのは精神を安定させる働きというものがあるので、歩いている人々の雰囲気づくりをするのに、すごく活躍しているものである。

しかし、今の話を聞いて、皆さんは音楽、普通にカセットテープとかCDでかけているものが流れるとか、あとは町なかでプロのミュージシャンの方たちが演奏するとか、歌っていたりしていることを考えたかと思われるが、それだけを指しているわけではない。私はもっと、僕も含めアマチュアの人たちが音楽を通してまち全体の雰囲気をすごく明るくしてほしいと考えている。

しかし実際問題、福井県では音楽スタジオ、例えばプロのミュージシャンの方々とかアマチュアのバンドの方々がリハーサルなどに使う音楽スタジオをはじめ、音楽に触れることのできる機会が物すごく少ないように感じる。先ほども例に挙げさせていただいたが、



音楽スタジオに関しては、嶺北では福井市で4つ、鯖江市で1つ、越前市で2つの計7つである。また、嶺南では敦賀市に2つしかない。これは私たちが調べた結果であるので、実際にはもう少し多かったりとか少なかったりとかするかもしれないが、これは、隣の県とかと比べても、とても少ないかなという現状である。これでは福井で音楽に親しむということがとても難しくなってしまうのではないかと私は思う。

今現在、福井県では、ヤマハミュージックジャパン社の協力の下、おとまちプロジェクトというものが行われていると思う。しかし実際、開催場所は鯖江市、越前市、永平寺町、美浜町、若狭町の5つと少なく、それ以外の場所では、僕たちも含め知名度がとても低い状況ではないのかと思う。実際、私もこの提言書を作るに当たって、おとまちプロジェクトの存在というものを初めて知ったので、こういう音楽に関してのイベントの知名度が福井ではあまりないのかなと思う。

そこでお尋ねしたいが、おとまちプロジェクトを含めた県の音楽関係の事業について、これからどのように進められていくのか。また、どのように発展させていかれるのか。

○文化課長 まず、今行っている「おとまち@福井」プロジェクト、こういった事

業を中心とした今の取組について御説明する。

まず、ヤマハミュージックジャパンと連携した「おとまち@福井」プロジェクトについては、広く町なかを中心に音楽振興を図るために開催しているものであるが、中田委員がおっしゃっていたように、アマチュアプレーヤーを増やして町なかに繰り出していくことでにぎわいを創出する、こういったことを目指している。このために婦人会とか商工会議所青年部といった地元根差した団体の協力を得て、音楽による仲間づくり、そして、市町サークルを拠点としたサークル活動といったようなものを行っている。

その市町によって大変温度差があつて、市町の協力を得て開催するもの、市町ホールを拠点としてサークルづくりを進めているものであつて、中田委員がおっしゃった5つの市町は、我々も営業活動をした結果、御協力をいただける市町として鯖江市など5か所において音楽サークルづくりといったようなことをやっている次第である。

ただ、市町に設置はしているけれども、そこに参加する方々はその市町の住民だけではなく、より広域に参加を促していて、よりたくさんの方に参加いただいているところである。

目指す姿としては、先ほど申し上げたとおり、そういった方々が、芸術の中でも音楽と美術は双壁となるものであるけれども、音楽は大変親しみやすく、皆さん高校生であるけれども、そういった学生の頃から吹奏楽などで親しんできたという素地がある。芸術に親しんでいる福井県の人口比の中でも、やはり音楽が一番たくさんおられる。そういったところから、音楽というものをきっかけにしてまちづくりを進めるといったようなことをやっているけれども、この取組を継続して進めていくことによって、これから新幹線でいらっしゃった方々が、町なかでにぎわいがあつて、楽しくて、明るくて、福井はいいところだなと思っただけのように進めていきたいと思っている。

○中田委員 先ほど言われたとおり、おとまちプロジェクトというものがもっと私たちの間まで広まっていけばいいなと思うが、先ほど言われたように、やはり温度差というものは生じると思う。

僕がそもそも提案したいのは、サークル活動というのもそうであるけれども、楽器に今まで触れたことがない、経験がない方に楽器に触れやすくする、それで音楽の楽しさを知ってもらうというのが一番なのではないかと思う。

それで我々が提案したいことは、新幹線の駅舎などを含めてストリートで演奏できる楽器などを設置してほしいと思う。幾つか例を挙げさせていただくと、一つはピアノである。皆さんユーチューブなどでストリートピアノなどの動画を見たことがあるかと思うが、ストリートピアノは話題性がとてもある。ユーチューブでもいろいろな有名なユーチューバーの方々がストリートピアノで有名曲を演奏して、周りの人がすごい感激の言葉をくださるような動画もよくあると思う。ストリートピアノというのは、単に話題性があるだけではなくて、誰でも簡単に触れることができる。もちろんプロの方々のように、ストリートピアノで上手な演奏をすることもできるし、アマチュアの皆さんでも、ピアノをどうやって弾くのか、みたいなことでもストリートピアノを活用することもできる。

また、福井県の名産である楽器、ハーブがある。永平寺町名産の青山ハーブは、世界でもシェア2位を誇るほどの有名なものだと思うが、2003年より地元中学校で選択科目の一つとしてハーブを演奏するなど、名産の楽器を地元の人に触れ合う機会を持たせるといっても、少し昔からであるが始まっていると思う。そのようにしてハーブなどもストリートピアノのように追加してほしいと思う。

このように、サブカルチャーとか音楽を含めたポップカルチャーなどの文化活動というのは、そのまままちの活力に直結すると思う。これらの活動をこれからも支援していただき、より盛んなものにしていくことが福井県のさらなる発展をもたらすのではないかと。ぜひ、今日質問したことを理事者側の方々に前向きに検討してほしいと思う。

最後に、森野委員から一言あるので、よろしく願います。

○森野委員　では最後に、伝統的な文化、さきほどのポップカルチャーとは一味違った、これがなぜ庇護されなければいけないのか、皆さんはどうお考えか。功利主義的な考え方から言うと、こういう伝統的な文化というのは真っ先に淘汰されるものではないかと思っている。行政という立場は、功利的な考え方でないと、税金をどう使うんだとか、そういうふうに言われてしまうので仕方がないことであると思っているが、そうすると経済的な幸福というものを追求することになると思う。

先ほど森口委員と中田委員の質問の中で、こんな予算をつけている事業があるよというのを文化課長が言われていて、ああいなど。もう少し伝統文化にもお金をつけた事業をしてほしいなど思っていたが、やはり、こういう文化の面は、ここだけでも考え方として経済的なものではなく、精神的な幸福というものを追求してほしいと思っている。



文化というものの自体、私たちの先祖が何百年、何千年と受け継いできたものである。つまり私たちのアイデンティティである。それらは民間で、今まで地域コミュニティがすごくしっかりあったので、自分たちの地区の中で親から子へ、子から孫へというふうに受け継いでいたものが、最近は新興住宅地などで地域コミュニティがどんどん希薄化している。その中で、民間にだけ任せるとするのは難しい社会状況になってきている。目まぐるしい社会状況の変遷の中で、いろいろと柔軟に考えてもらえるとうれしいかと思っている。

文化が廃れていくのも文化なのではないかと言う人もいるが、残そうという努力もせずにそれを言うのは筋違いなのではないかと考えている。

また、現在、ウェルビーイングというのが、SDGsに次ぐはやりであると思っているが、これは心身と社会的健康を意味する言葉で、これには文化面の充実というのはすごく重要になってくると思うので、理事者の方々にもぜひ御理解をいただいて、文化の保存とか継承とか文化活動の支援にこれからもお力添えをいただきたいと思う。また、欲を言えばもっと多大なる支援と御協力をいただけることを願っています。

○文化課長 決して伝統的な文化をないがしろにしているわけではなく、私ども文化課としても伝統的な文化を残し伝えること、そしてそれを基にした革新と創造、これがとても大事だと思っている。

我々としては、今改めて福井県の文化振興プランを策定しようと考えているところである。こうした中で新幹線が開業され、新しい次の時代、次のステージに向かって文化をどのようにしていくべきかというのを改めて考えていきたいと思う。

森野委員をはじめとする皆さんの意見を十分に考えながら、策定に向けて進めていきたいと思っている。

○森野委員 変えるところは変えて、変えないというある程度のラインはしっかり引いていただいて残していただきたいと思うので、よろしく願います。

○小堀委員長 ほかに発言もないようなので、ここで休憩する。

再開時間は後ほどお知らせする。理事者の方は退室を願う。

～休 憩～

○小堀委員長 では、休憩前に引き続き、委員会を開く。

それでは、先ほどの議論を踏まえて、最終の提言書案を作成したいと思う。

お手元にある提言書案について、修正したほうが良い部分があれば、発言願う。

○森野委員 提言書の3を「文化」に関するテーマを1つ決め、それに関する事業を年度毎に行っていくこと」に修正したい。

○森口委員 提言書の5のうち、「活躍する人材の育成、発表機会の創出、コミュニティ形成等のサポートをすること」を「活躍を望んでいる人材に対して、練習機会、発表機会等の創出、支援を行うこと」に修正したい。

○中田委員 提言書の6のうち、「新幹線駅舎等にストリートピアノをおき」を「新幹線駅舎等に福井にちなんだオリジナリティ溢れるデザインのストリートピアノなどをおき」に修正したい。

○小堀委員長 森野委員、森口委員、中田委員から、これら部分について修正したいとの発言があったが、そのようにしてよろしいか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○小堀委員長 特に異議もないようであるので、そのように修正する。

ほかにないか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○小堀委員長　ほかにないようであるので、提言書案については、修正した案のとおりとし、再開後に申し渡しを行うこととしてよろしいか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○小堀委員長　特に異議もないようであるので、そのようにする。
ここで、再度休憩する。

～休憩～

○小堀委員長　休憩前に引き続き委員会を開く。
先ほどの議論を踏まえて、県に対し提言書を提出することに決定している。提言書の案はお手元に配付してある。
このことについて、委員より説明をお願いします。

〔各委員、別紙「福井県の文化活動振興に関する提言書」に基づき、説明〕

○小堀委員長　説明が終わったので、提言書を提出していただく。
森口委員、高校教育担当副部長は中央までお願いします。
では、提言書を渡してほしい。

〔提言書申し渡し〕

○小堀委員長　席にお戻り願う。
提言書の提出が終わったので、以上で議事は終了する。
これで、高校生県議会のONDOツルガチームの委員会を閉会する。



～ 以 上 ～

福井県の文化活動振興に関する提言書

「文化」というものはその土地に住む人々のアイデンティティであり、最も重要なものであると言えるが、近年その存在が有耶無耶にされがちである。また、「文化」にも多くの種類があるが、それらに共通して言えることは「人々の心の根底にあるもの」ということである。

これら「文化」は様々な要因により文化の保存・継承が難しく、また文化活動が制限されている。そのような状況を打破し、福井県が文化の県として活性化するよう、様々なアプローチを行っていかねばならないと考える。

また、「幸福度ランキングNo.1」を謳っている福井県であるが、文化分野に関しては全国でも下位である。

そこで、福井県の文化活動振興に関する施策について、以下の通り提言する。

- 1 福井県内に存在する「民謡」「新民謡」を収集し、音源や踊りなどの保存を図ること
- 2 「ふるさと教育」において「民謡」「新民謡」の活用を行い、児童生徒の「愛郷心」の醸成を県が音頭をとって行うこと
- 3 「文化」に関するテーマを1つ決め、それに関する事業を年度毎に行っていくこと（福井の方言愛着ましましプロジェクトの様に）
- 4 福井が舞台のサブカルを活用して福井の魅力をPRすること
- 5 県内のポップカルチャー・サブカルチャーでの活躍を望んでいる人材に対して、練習機会、発表機会等の創出、支援を行うこと
- 6 新幹線駅舎等に福井にちなんだオリジナリティ溢れるデザインのストリートピアノなどをおき、街全体で音楽に触れられる機会を作ること

令和5年8月1日

福井県知事 杉本達治様

福井県立敦賀高等学校
チーム「ONDOツルガ」
森野巧巳
中田哉音
森口蓮叶

藤島高校 AGORAチーム 委員会会議記録

- 1 日 時 令和5年8月1日(火曜日)
午後 1時20分 開会
午後 2時45分 閉会
- 2 場 所 第4委員会室
- 3 出席委員 山浦委員長、南川副委員長、
林委員、中野委員、山岸委員、廣野委員
- 4 欠席委員 なし
- 5 議会局職員 書記 土田総括主任、古道総括主任
- 6 説明員 (総務部)
大学私学課長
(未来創造部)
交通まちづくり課参事(交通対策)
(交流文化部)
観光誘客課長、新幹線開業課長補佐
(教育委員会)
高校教育課参事(大学進学サポート)

○山浦委員長 ただいまから令和5年度高校生県議会AGORAチームの委員会を開会する。

初めに、注意事項などについて幾つか申し上げる。

まず、発言の際は、挙手をして委員長の許可を得た上で発言してほしい。また、必ずマイクを使用してほしい。発言を始めるときにスイッチを入れ、発言が終わったらスイッチを切ってほしい。

次に、会議中、パソコン、スマートフォンなどの使用が可能である。ただし、着信音などが鳴らないように設定をお願いする。また、撮影も可能であるが、ほかの人の発言の妨げにならないようお願いする。

次に、本日の出席者の自己紹介に移る。

副委員長から順をお願いする。

[委員、説明者自己紹介]

○山浦委員長 それでは、議事に入る。

本日議論するテーマについては、次第にも記載してあるとおり、委員の皆さんに考

えていただいているので、まず委員からテーマについて発言をお願いする。また、テーマについて、説明者に質問等があれば、併せてお願いする。

○林委員 早速、質問する。

私たちの意見として、福井県の観光誘客のためにアプリが有効であると考えているけれども、まず本県は日本人の年間の観光客数が都道府県別に見て少なく、またブランド総合研究所の地域ブランド調査によると、全体31位で石川県や富山県に大幅に負けており、ブランド力や知名度に課題を抱えていると考えている。

そこで、観光振興について自分で考えてみた。まずお伺いしたいのは、現在の福井県の観光振興策のうち、インターネットを利用した施策について具体的にお教え願う。

○観光誘客課長 現在の福井県の観光政策の振興策のうち、インターネットを利用した施策についてのお尋ねにお答えする。

県では、観光連盟のホームページ、ふくいドットコムにおいて、本県の観光情報を発信している。ふくいドットコムというのは、令和3年度に大幅に改修を行ったところ、令和4年度のページビュー数が過去最高の約890万回、対前年比で178%となっていて、県内外から本県に訪れる観光客の重要な情報源となっている。

さらにページビューを増やすために、ふくいドットコムのホームページ上から福井県内の宿泊施設、体験メニューの予約ができるシステムの構築、また福井県内を巡るモデルコースの掲載など、観光誘客に向けて充実を図っているところである。

○林委員 次に、私たちは観光誘致にアプリを活用することを考えているが、本県において、観光誘致等に関わるアプリはあるか。あるとしたら、それは観光業でどのような内容で、その効果についての分析があれば教えてほしい。



○観光誘客課長 観光誘致等に係るアプリ、またその内容とその効果の分析についての御質問であるが、県では、観光誘致に関わる取組として、アプリの代わりに先ほどもお答えした県観光連盟のホームページ、ふくいドットコムにおいて情報発信を行っているところである。また、ふくいドットコムのアクセスデータやアンケートによる主要観光地の人流データ等を福井県観光データ分析システム「FTAS」というのがあって、そちらを使って分析をしていて、ホームページ上にも公開をさせていただいている。

この分析したデータとか元データについては、観光事業者が観光サービスの向上や商品開発等に役立てられるほか、県としてもターゲットを絞った観光政策に生かすことにより、観光客の満足度を高め、福井県ファンやリピーターを増やすとともに、観光消費額の増加につなげていきたいと考えている。

○林委員 福井県では現在、ふくいドットコムというウェブサイトを使って観光の活用をなされているという話であったが、アプリを使うよりもウェブサイトを使って

観光誘客をするメリットを教えてください。

○観光誘客課長 実のところ、本県を訪れる観光客のほとんどが50代、60代の高齢の夫婦が多い。その方々が本県に来られて、アプリをダウンロードするということが難しい方もおられれば、らくらくホンみたいな携帯の仕様においては、なかなかアプリが取り込みにくいか、仕様によっては古い携帯だと読み込めないとかいうこともあるし、また更新などにも費用がかかるかなと思うので、それよりは万人が検索できるホームページ上を整備して、それを使ってデータを収集して公開したほうがよいかなど考えていて、現在はそのような方策を取らせていただいている。

○林委員 それでは、20代とか30代の人とか私たちの目線からいって、アプリのほうを使いやすかったりするけれども、若者の観光客を呼び込むために、県がインターネットを活用してやっていることはあるか。

○観光誘客課長 県としては、高齢の夫婦のほかに、次に多いのがお子さんを連れて家族連れ、そして次が一人旅という観光客層が多くなっている。

若い方たちというのは、高校生ぐらいだと、なかなか単独で来られることはないで、家族で来られることが多いのかなと思っているけれども、そういった方向けに、現在もホームページ上で体験メニューを公開している。旅行業者様といろいろ相談して、市町でそういった体験メニューをつくった場合に補助したり、そういう支援もしているんで、そういうことで若い方も一緒に楽しんでいけるようなことを今後も進めたいと思っている。

○林委員 福井県の観光業において、50代、60代の夫婦が多かったりするという話をおっしゃっていたと思うけれども、その特定の観光客層に効率よくマーケティングをするのに、実際、福井県はどのような策を取っているのか。

○観光誘客課長 具体的にその層向けというものは特段、今のところ、アンケートで分析が始まったのが最近のことであるので、そういった年齢層にターゲットを合わせた戦略というのは行われてはいないけれども、福井県の方には、永平寺や先ほどおっしゃられた平泉寺など、そういった層の心に刺さる観光資源がたくさんあるので、観光客が福井に来たいと思っていただけるような情報発信が今後必要かなと思っている。



○林委員 福井県において、今はリピーターがそこまで多くない状態だと思うけれども、福井県内においてリピーターを増やすために、もう一回福井県に来てもらう動機を強めるために、どのようなことをやっているか。

○観光誘客課長 リピーターの率であるけれども、福井県観光連盟が「ふくい旅 答

えてHAPPINESSプレゼントキャンペーン」というのを実施しているが、そちらのアンケート結果によると、福井県への訪問が2回以上の割合というのが41.5%となっている。

リピーターを増やすためには、もう一度来たいと思えるような観光地の磨き上げ、そして宿泊施設の充実が効果的であると考えていて、県においては、旅行会社からの助言を得て、先ほども申し上げた体験メニュー、もしくはグルメ商品、そういった開発をする市町に対して支援をしている、稼ぐ観光地づくり応援プロジェクト事業、そして、ホテルや民宿を伝統工芸ルームにしたり、ペットと泊まれる宿にしたりするなど、そういった改修を支援する多様な宿泊施設整備支援事業等を実施していて、こうしたことによって福井県を訪れた方にリピーターとなっていただけのような対策を行っているところである。

○廣野委員 現在、2019年時点で福井に来る外国人観光客は6.4万人で、都道府県別で46位という順位になっている。

そこで私たちは、北陸エキスポを海外出展することにより、海外に本県の魅力を発信し、訪日外国人により多く福井に来てもらえるようになると考えているが、現在、



県では同じ北陸3県である石川県、富山県とどのような連携体制を取っているか。また、富山や石川をライバルとして見るのではなく、連携し、競争し合うことによって、それぞれの地域や魅力をより高め合うことができると考えているが、そこについてもどうお考えか、意見をお聞かせ願う。

○観光誘客課長 北陸3県での連携について、県では、富山県、石川県とともに平成11年度から北陸国際観光テーマ地区推進協議会というのを設置していて、お互いに協力して北陸3県を周遊する観光ルートの宣伝、あとは海外旅行博への出展、海外メディアの招聘、セミナー、相談会などを行っている。

○廣野委員 今、北陸3県では説明いただいたような取組を行っているというふうにお聞きしたが、そこで実際にどのような効果が得られたか、そういうデータはあるか。

○観光誘客課長 実のところ、海外展とかに出展させていただくけれども、来られる観光客の方がその結果で来られたかどうか、なかなか効果をはかることが難しいというのもある。

ただ一方で、石川県にはかなりたくさん観光客の方がお見えになっていて、その反面、福井のほうにはまだまだお見えになっていないということで、必ずしもその効果が外国人に刺さるもの——魅力が足りないのかもしれないが、効果は分からないが、今後そういった効果が出るようなことも考えて、何が外国人に対して刺さるのといったことも含めて、より一層、勉強してまいりたいと思うし、PRもしていきたいと思っている。

○廣野委員　では、北陸エキスポのような北陸3県で連携したイベントをこれから行っていくということについて、どのような効果が予想されると思うか。

○観光誘客課長　北陸3県で連携した観光イベントへの出展だが、今年度については北陸3県で最も訪日旅行者が多い台湾のほうに11月に参る。また、訪日旅行の早期回復が見込める東南アジア市場であるシンガポールについても、来年の冬、旅行博へ出展する予定をしている。この旅行博に3県で出展することによって、展示ブースで旅行に興味のある消費者と直接会話をすることができるし、旅行ニーズを把握することができるというメリットがある。また、対面で来場者と話をするので、県が主導権を持ってアピールできる、観光情報を伝えることができるということもある。

また、3県で出ることによって費用も3県で分担できるというメリットもあるので、そういった意味でも3県で出展という効果は高いと考えているので、今後も進めてまいりたいと思っている。

○廣野委員　私たちは、本県は歴史や自然、食べ物など優れた観光のポテンシャルを持っていると考えていて、北陸エキスポを実施するとして、その中で伝統工芸品や特産物などをブースごとに分けて出展することを考えている。その中の一つとして、芦原などで有名な温泉をPRするという案を考えているが、現在の福井県の温泉に関するPRについてお教え願う。また、福井県にリピーターとして繰り返し来てもらうための観光資源としては何が有効であると考えているかも併せてお願いする。

○観光誘客課長　今のお尋ねであるけれども、令和元年の観光庁の訪日外国人消費動向調査というのがあって、そちらで「訪日前に最も期待していたこと」という質問があった。その回答の中で、温泉は約7%にとどまっていて、外国の中にはお好きな方もいらっしゃるが、やはり他人に裸を見せる習慣がないとか、タトゥーがあって温泉にも入れないというような文化、風習等の違いから、温泉は必ずしも、こちらが思うほど期待していないのかなということが明らかになっている。

しかし一方、温泉は本県の重要な観光資源であるし、また露天風呂つきの客室などを設けている旅館なども増えているので、国内外に向けたPRというのは重要であると考えている。

先ほどのふくいドットコムという年間約890万ページビューを誇るホームページもあるので、そういったところで温泉情報の掲載、または温泉旅館の予約ができるシステムの構築などを行って、また、芦原温泉と組み合わせたツアーを提案するなど、温泉のPRを行っているところである。

リピーターとして繰り返し来てもらうためには、福井は豊かな自然に育まれた美味しい食というものがある。それが重要な観光資源であると考えているので、食と温泉、そして観光地を組み合わせたPRを行うことが有効であると考えている。

○山岸委員　私のほうからは、体験型観光について質問する。

私たちは、体験型観光が福井県の観光の柱になると考えている。しかし、本県の体

験型旅行は知名度が低いのが現状であると考えている。

そこでお伺いする。福井の観光地で実際に行われている体験型観光は、具体的にどのようなものがあるか。そして、その効果についてデータがあれば教えてほしい。

○観光誘客課長 体験観光についてのお尋ねである。

福井県においては、恐竜博物館では化石発掘体験、永平寺では座禅などの修行体験、三方五湖ではボートやカヤックなどアクティビティ体験など、様々な体験型観光を楽しむことができる。そのほかにも、伝統工芸では眼鏡、そして越前打刃物、若狭塗箸など福井が誇る伝統工芸にちなんだ体験や、越前そば打ち体験、越のルビーの収穫体験など、食に関連した体験も県内各所で行われているところである。

体験型観光の効果についてはデータは有していないけれども、旅行先の体験というのは、本県を訪れた観光客の思い出に深く刻まれるものと考えているし、本県を訪れる観光客が熱心なリピーターとなっていただくためにも、引き続きこういった旅行会社等のアドバイスを受けながら、魅力的な体験コンテンツ造成を行ってまいりたいと考えている。

○山岸委員 先ほど言った体験型観光に加えて、私たちは訪日観光客へのガイドをより充実させることが有効だと考えている。そのために、多言語にわたるガイドの育成が必要だと考えている。

そこでまず、訪日観光客の国別データがあれば教えてほしい。また、現在行われている県のガイドの充実策について教えてほしい。また、ガイドによる観光客の満足度の変化に関するデータがあれば教えてほしい。

○観光誘客課長 まず、訪日観光客の国別データについてお答えする。

本県における訪日観光客の国別データとしては、観光庁が発表している宿泊旅行統計調査というのがある。このデータを基に県が推計する宿泊数については、新型コロナが蔓延する以前の令和元年の数字になるけれども、台湾が最も多くて2万3,830人泊、2番目が香港で1万9,440人泊、3番目が中国で1万8,130人泊、4番目がアメリカで4,400人泊、5番目が韓国で3,960人泊となっている。

次の、観光ガイドの充実が有効であるが、その方策、またはその満足度の変化に関するデータについての質問である。

訪日観光客向けのガイドの充実策として、県では、県内の全国通訳案内士というのを対象にして、実務経験が豊富な通訳案内士を講師としてお招きし、観光地での研修を行うことで案内士の技術向上を図っているところである。

ガイドによる観光客の満足度の変化に関するデータは持ってはいないけれども、令和2年に観光庁の上質なインバウンド観光サービス創出に向けた観光戦略検討委員会というのがあって、そちらで提示された資料によると、インバウンド富裕層のサービスニーズの一つとして、質の高いガイドによる解説というのが挙げられている。ガイ



ドの充実と質の向上が重要だと考えているので、引き続き努力してまいりたいと思う。

○山岸委員 先ほどのガイドにより観光を充実させるということに加えて、本県の魅力を発信する上で、県民で構成される観光人材を強化していくことが重要だと私たちは考えている。例えば県が認可を出し、ガイドなどの人材のブランディングを図ることなどを考えている。単なる観光大使だけではなく、ボランティアに頼るわけでもなく、予算をつけて、県から認可されたこのガイドさんなら分かりやすく面白い話が聞けるといったブランドイメージを確立していくことがリピーターの増加につながると考えている。

そのような施策は既に行われているのか。あれば、具体的な事例を教えてください。

○観光誘客課長 ガイドの人材的ブランディングを図るような、リピーター増加に係る施策についての質問である。

県においては、通常、観光ボランティアというのは市町ごとに持っているけれども、観光客のニーズに合わせて、市町をまたがって広域なエリアで観光案内ができるガイド人材を養成するために、実践的な演習を通してガイディングという技術を学ぶことができる福井県認定観光ガイド養成講座というのを平成28年度から開催していて、これまでに217名を認定してきた。

また、観光事業者やガイドを対象に、ガイドの説明を受けながら観光地を周遊するというガイドツアーを作成するワークショップも開催していて、昨年度は5件のガイドツアーを造成し、観光客にも大変喜ばれているところである。

新幹線開業を目前に控えて、本県の魅力を効果的に伝えるガイドの人材の育成というのは重要であって、本年度は講座、ワークショップに加えて県外の先進地の視察も行って、さらにスキルアップを図るなど、内容を充実させて実施していく予定をしている。

○中野委員 私からは、学生の観光参画についての質問をしたいと思う。

私たちは、学生を中心とした若年層の観光への参画が効果的だと考えているが、現在、県として観光に対する若年層の意見をどのように反映しているか聞きたい。

○観光誘客課長 若年層の観光への参画、どのように意見を反映しているかという質問である。

県では、県民の声を県政に反映させるため、「現場でトーク」という取組を行っている。令和4年度においては、中学校、高校、大学16校の学生と、本県観光における意見交換を行ったところである。

また、J R西日本と自治体、大学が連携して、大学生が本県の旅行プランや地元の課題解決に向けたアイデアを自治体に提案するという、そういった場にも県も参加していて、県民目線による観光誘客につながる福井県の魅力あるコンテンツ等の充実を図っているところである。



○中野委員　　私たちは、全県下の高校生が探究学習において本県の観光について研究を行い、その中で優れたアイデアを県の施策として取り入れることを検討していたきたいと考えている。

そこでお伺いする。もう既にそのようなネットワークはあるのか。あれば、立案した事例等を教えてほしい。

また、なければ、どのようなネットワークの構築が有効であると考えているか、教えてほしい。

○観光誘客課長　　そういったネットワークによって立案した事例と、どのようなものが有効であるかのお尋ねである。

先ほど申し上げた現場でトークという取組を行ってはいるけれども、実のところ、まだ参考にとどまっていて、具体的な立案に至ったものというのは特になかった。

しかし、若い世代の意見というのは、今後の観光施策を検討する上でとても重要であると考えている。探究学習において検討いただいたアイデアについても、取りまとめて提案していただければ政策の参考とさせていただくので、またよろしく願います。

○中野委員　　先述した北陸エキスポに県内の高校生や大学生を派遣することも有効であると考えている。こうすることにより、若者が本県の魅力に気づき、人口流出を防ぐ効果もあると考えられるが、どのようにお考えか。

○大学私学課長　　確かに先ほどの質問にあったように、北陸エキスポなどの福井県の魅力を発信するところに学生が、若い方が行って本県の魅力に気づくことは非常に大事なことかと思う。特に若い方の情報発信力、例えばSNSなんかを使った情報発信というのは非常に影響力があると思うし、福井県の魅力を探る際にも、若い方からの視点、私たちとは違ったそういった視点というのも大事なものであると思う。



今、県内大学においてPBL、課題解決型学習というけれども、簡単に言うと皆さんも高校のほうで探求、総合的学習というのをやっているかと思うけれども、大学においてもゼミとか一般教養などで課題解決型学習というものをやっている。現場に入って、現場で自分で課題を見つけて、それを解決していこうと。そういった学習をやっていて、福井県としては大学のそういった教育活動に支援しているところである。

その中で、例えば先ほど外国人観光客の話もあったけれども、県内市町の自治体に学生が入って、その自治体の魅力を伝える観光パンフレットを英語で作ったりとか、あと三国港とか三国駅前で、学生が入って、魅力発信のための例えばバス停のデザインを研究したりとか、また、越前水仙など地元の特産品の魅力アップをしようという学生の活動がある。

そういった活動の一環として、そういうエキスポ的なところに行かれて魅力を学生

自らが知っていくというのは非常によいことだと思うので、それは皆さん、活用していただければいいと思うし、ぜひ皆さんもこれから大学進学の際には、県内大学も視野に入れていただいて、進学した際には、そういった活動で本県をぜひPRしていただければなと思っています。

○林委員 僕たちの一つの意見として、SNSを活用していきたいというのが一つあるけれど、特に若年層がSNSによる発信力というものを持っているんだと思うけれど、福井県の観光にSNSを生かそうと思ったら、福井県に実際に来た観光客が、福井県のよかったところをSNSで紹介するということが効果的だと思うけれど、それでSNS割というのを導入して、SNSで拡散してくれた人に対して割引するという案であるけれど、これについての実現可能性であったり、そういうのを教えていただいてもよいか。

○新幹線開業課長補佐 今、県の観光連盟のほうでInstagramフォトコンテストというのをやっている。こちらのほうは令和3年から始めていて、「私の好きな福井県」というハッシュタグをつけて、県民の方がInstagramで自分の好きな福井県の写真とか食とか風景とか、そういったのをハッシュタグをつけて投稿するキャンペーンをやっている。

こちらについては令和2年からやっていて、現在7万件以上の投稿があつて、福井県の方が自分で魅力を再発見するということにつながっていて、そこでプレゼント企画なんかもやっているの、可能性はある。

○林委員 福井県民がSNSを使って写真とかを投稿するというのももちろん効果はあると思うけれども、一番説得力があるのは、福井県外から人が来て、福井よかったよと発信するのが、一番行きたいなとなると思う。そうなるような取組というのは今どうなっているか。

○新幹線開業課長補佐 そちらについては、今、東京の出版会社、OZmallというところと連携して、県外の旅行系のインスタグラマーで、福井女子部というメンバーを構成して、若年女性の方々に福井県に来ていただいて、県内を回っていただいて、県内の映える地域などを投稿していただくという活動を行っている。その投稿結果については雑誌とか若年女性向けの旅行サイトのほうに掲載して、首都圏から全国にSNSで福井の魅力を発信していただいているという、そういう活動をやっている。

○林委員 今までの話の結論として、福井県は、現状の政策でどの層に観光に重点的に来てほしいのかというところが、話を聞いていて結構気になっている。全体の層に向けて観光をするというよりは、特定の例えば所得であったりとか、性別であったりとか、あとは日本人か外国人かとか、そういう条件に合わせてマーケティングするのが効率はいいと思うけれども、今、福井県の方針として誰に来てほしいのか。

○観光誘客課長 いろんなあらゆる層に来ていただけるといいなと思うけれども、

やはり福井のよさというのは一回来てもらうとより分かると思っている。既に来ていただいている50代、60代の高齢の夫婦、そして先ほど申し上げた子ども連れのファミリー、そして一人旅というのは関西圏からが多いようであるけれども、そういった方々に来てもらって、またそういった方が福井に来てよかったよと言ってもらうことで増えると思う。また今後、やはりインバウンドも弱いと思っているので、そういった意味ではインバウンドの方々も富裕層の方々は、人がたくさん来ているところよりも、かえって福井の人があまりいない田舎みたいなそういったところを好むという話も聞いているし、座禅の「禅」と自然の「然」、あとお膳の器ということで伝統工芸、そういったものを組み合わせて「ZEN」ということで売出しも仕掛けているので、富裕層の外国人をターゲットとして、より満足していただいて、さらにそういった方が観光地を巡るだけではなく、行ったところでまち歩きをしてお金を落としてもらい、もう1泊してもらい、そういった取組を増やすことによって、お金も稼ぐ観光地にしていきたいと思っている。

○林委員 今の話は、富裕層の外国人観光客への観光の魅力度を上げたりという方策だと思う。まず、外国人の富裕層に福井県のよさというものを知らせてもらわないと始まらないと思うけれども、外国人の富裕層に福井県を知ってもらうために今どういうことをしているか。

○観光誘客課長 外国の富裕層の方という話であるけれども、実は今年の6月補正予算において、自家用ジェットなどで福井を訪れるツアーをつくれないうことで、福井空港を活用したツアーの造成事業を行おうとしている。まだこれから業者も選定して、どのようなコースをつくらいいのかというアドバイスをいただきながら、テストのルートを一回、今年度中に行う予定であるけれども、そういったコースをつくることで、また外国の富裕層の方に売り込める。そういうノウハウ自体も我々はないから、そういったツアーを造成する方たちを通じて、こういったコンテンツが刺さるのか、そういう情報も収集しながら売り込んでいきたいと思っている。

○林委員 さっきアプリとウェブサイトの話を見せていただいて、アプリのメリットとして、ウェブサイトは万人受けして、アプリとかは若者が使いやすいというメリ



ットがあるという話をしたと思うけれども、今考えていたら、ウェブサイトは自分から調べないと基本的に情報とか開けたりしない。でもアプリは、例えば通知が来たりとか、アプリを持っているという状態さえできてしまえば、例えば福井県でこういうイベントをやっているよとか、そういう情報が来たりというメリットがあると思うけれども、やっぱりアプリは駄目か。

○観光誘客課長 とてもアプリは使いやすくてもいいなと思うけれども、一方で世の中、何とかアプリ、何とかアプリと、結構私のスマートフォンなんかもアプリだ

らけになってしまっているようなところもある。

それを定期的に何か改修するとダウンロードし直してということもあるので、アプリはとても便利であるし、いいと思うけれども、そういったいい面と悪い面、デメリットを踏まえながら、何だったらアプリがいいなとか絞って、何でもかんでもアプリにするのではなくて、ここはホームページに譲ろう、でも、これはアプリが一番いいからしていいこうみたいなことで、導入するとすればそういったことを考えながら戦略的に進めていきたいと思っている。



今の段階では、まだホームページにアクセスしてくる方たち、観光連盟のほうでいっぱいいろんな観光情報、データを集めているところであるので、そういったものを活用して情報発信を進めているところであって、その先にアプリ開発があるかちょっと分からないけれども、結構費用もかかるので、簡単に作ってしまうのではなくて、考えながら、何が効果的か分析しながら進めてまいりたいと思っている。

○山岸委員 さっきガイドを充実させることについて質問させてもらったと思うけれども、訪日観光客に対してガイドを行うときは日本語以外の言語が必ず必要になると思う。先ほどの質問ではガイドの育成に関する回答はいただけたけれども、日本語以外を使った言語でガイドを行うことに対する育成とかは実際に福井県で行っているのか。

○観光誘客課長 実のところ、全ての外国語を話せるガイドさんを育成するのはすごく難しいので、今はもう便利な通訳アプリみたいなものもあって、観光案内所のほうにはそういった通訳アプリです。あと、看板なんかもローマ字で読めれば、外国の方はローマ字というか英語表記されていれば、それで行き先さえ分かればよいので、タクシーの運転手に「TOUJINBO」と言えば、行き先に行ければいい。そういう形で、必ずしも全ての言語を話せる必要はないのかなと思っています。現時点では、何か国語をしゃべれるとか、それぞれの国に応じてガイドさんを育成しようと、そういったところまではまだ進んでいない。

○廣野委員 北陸エキスポについてということでさっき聞かせていただいた。福井県にリピーターとして繰り返し来てもらうための観光資源として、先ほどおっしゃったとおり温泉も一つとして、食であったりとか自然であったりとか、そういうのが有効であるというふうにお聞きしたが、実際にそういった資源を活用したリピーターを獲得するための取組というのはどのようなものがあるのか。

○観光誘客課長 人の好みはそれぞれであるので、食べ物がおいしいから、おそばがおいしかったからまた来ようと思う人もいれば、お子さんであると恐竜博物館で発掘体験が楽しかったからまた行こうよとか、宿がよかったからもう一回来よう、そう

いうふうに思うのは人それぞれであるので、私たちができることと云ったら、実際はおもてなしがなくて、行ってよかったなと思っもらうには、素材は当然自慢できると思うが、福井県は食もおいしいし、自然もきれいだし、歴史、文化も育まれているし、温泉もいとお湯が出る。そういったものをいかによかったなという思い出に付加させていくとしたら、タクシーの運転手さんのおもてなし。今は高齢の方が多いので、なかなかそこまで大変なところもあるけれども、そういったものを地道に進めていって、あとは使い勝手がいいWi-Fiを整えるとか、そういった補助的な周辺整備を進めていって、福井県で不便を感じないようにすることで、もう一回行きたいなと思っただけのようにしていきたいと思っっている。

○林委員 福井県の観光地とかで、おもてなしを強化するのはすごく大事だなと思っ、私も他県の観光地とかへ行ったときに、この人の接客がよかったな、逆に悪かったなとか、そういうのは記憶に結構残るもので、例えば旅館の人であったり、タクシーの運転手さんであったりとか、そういう福井県内においてのおもてなしを充実させるために、福井県は何をしているか。

○観光誘客課長 これまで県のほうで、おもてなし認定制度というのをやっていて、やる気があるというところであるけれども、そういう講座を受けてみようとか、試験を受けてみようとかいう方に対して、セミナーなどを開催したりして、認定などもしてきた。

今年度も新たに、そういった方たちに対してチェックをしてもらうような機会も設けていきたいなと思っ、そういうものを繰り返すことで、外部の人にチェックをしてもらって、ここがよくなかったよ、あれだったよというのを指摘してもらうことによって、やっているつもりだったということがないようにしていきたいなと思っ、

○山浦委員長 ほかに御質問はないか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○山浦委員長 では、ほかに発言がないようなので、ここで一旦休憩する。再開の時間は後ほどお知らせする。理事者の方は退室願う。

～休 憩～

○山浦委員長 休憩前に引き続き委員会を開く。

それでは、先ほどの議論を踏まえて、最終の提言書案を作成したいと思っ。

お手元にある提言書案について修正したほうがいい部分があれば、御発言願う。

○廣野委員 北陸エキスポの海外出展というところについて、日本という枠組みではなく、海外で北陸3県が独自でできる魅力を発信するイベントの海外開催を提案す

るという形に変更したいと思う。

○山浦委員長　それではよろしいか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○山浦委員長　異議がないようなので、そのように修正する。
ほかにはないか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○山浦委員長　特にないようなので、提言書については修正した案のとおりとして、再開後に申し渡しを行うこととしてよろしいか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○山浦委員長　特に異議もないようなので、そのようにする。
ここで、再度休憩する。

～休憩～

○山浦委員長　では、休憩前に引き続き委員会を開く。

先ほどの議論を踏まえて、県に対し提言書を提出することを決定している。提言書の案は、お手元に配付してある。

このことについて、委員より説明をお願いします。

〔各委員、別紙「福井県の観光振興に関する提言」に基づき、説明〕

○山浦委員長　説明が終わったので、提言書を提出していただく。

林委員、観光誘客課長は中央までお願いします。

〔提言書申し渡し〕

○山浦委員長　席にお戻り願う。

提言書の提出が終わったので、以上で議事は終了する。

これで、高校生県議会のAGORAチームの委員会を閉会する。



～以上～

福井県の観光振興に関する提言

福井県は日本人の年間の観光客数が都道府県別にみて少ない（「旅行・観光消費動向調査（2019）」）。また、ブランド総合研究所の地域ブランド調査によると全体31位で石川県や富山県に大幅に負けており、ブランド力、知名度に大きな課題を抱えている。また来福外国人観光客も2019年時点で6,4万人であり、全体46位である（訪日外国人消費動向調査）。また福井県全体の観光客層と高消費層の性別や年齢の性質が変わらず（福井県観光客傾向調査 令和4年度）、特定の層に関わらず均一に需要喚起を行っていると考えられる。福井県は歴史や自然、食べ物など優れた観光ポテンシャルを持っていると考えられ、それを効率的に旅行者へPRできておらず、その結果リピーターも少ないのではないかと。私たちは福井県に来ていただける観光客を特定の層（外国人観光客、高所得層など）に絞りこみ、リピーターを増やすことが重要であると考えます。

1 観光一元化アプリ「ふく得」の導入

私たちは福井県の観光アプリを導入し、それを一つにまとめるアイデアを提案する。ターゲットは高消費層である。まずそのアプリを通して、行動ターゲティング機能をつけて観光情報を提供する。宿泊施設や民泊の予約をやすくし、宿泊施設の利便性を高める。またレンタカーやタクシーの予約をアプリ上で取りやすくする事によって、二次交通の利便性を高める。そしてこのアプリの一番のアピールポイントは福井県で消費した額に応じて特別な体験ができるという点だ。例えば福井県での座禅体験や地元産の食材を用いた限定の食事、伝統工芸品の製造体験などだ。この案により福井県に高消費層を引き込むことを促すと考える。

2 北陸エキスポの海外出展

私たちは海外で北陸3県が独自でその魅力を発信するイベントの海外開催を提案する。出展先は中国やインド、東南アジアなどの新興国である。福井県は禅や恐竜など海外に発信できるような魅力が多くある。そこで地域間で連携し競争しあうことによってそれぞれの地域の魅力を高め合うことができる。また外国人にとっては北陸3県でどこに行くか選択を出すことによって北陸3県、更に言えば福井県に行く動機を強める事ができる。

3 体験型旅行の推進

私たちは観光の満足度を上げるために体験型旅行が有効であると考えます。ただ福井県の体験型旅行は全く知名度がない。だからSNS割を導入する。SNSを利用して拡散した人に対し割引する。そうしてSNSを通して来てくれる人が増える。また旅行に来てくれた人の満足度を上げるために観光人材を強化する。県が認可を出し、ガイド等の人材のブランディングを図る。福井県民が積極的に観光に参加し観光客に福井県について知ってもらおう。それが大切であると考えます。

4 学生の観光参画

福井県の県立高校の探究活動において福井県の観光をテーマとして考えてもらう。高校生が自分で自分の地域の観光について考える事により柔軟な発想を観光に取り入れられる。また先述した北陸エキスポに県内の高校生や大学生を派遣することも有効であると考えます。こうすることにより若者が福井県の魅力に気づき人口流出を防ぐ効果も考えられる。

令和5年8月1日

福井県知事 杉本 達治 様

福井県立藤島高等学校

チーム「AGORA」

林 瑞希

山岸 聡

廣野涼介

中野 薫

道守高校 Sky-Highチーム 委員会会議記録

- 1 日 時 令和5年8月1日(火曜日)
午後 1時20分 開会
午後 2時32分 閉会
- 2 場 所 大会議室
- 3 出席委員 山本委員長、中村綾菜副委員長、
湊委員、中村珠月玖委員、西野委員
- 4 欠席委員 杉本委員、笠松委員
- 5 議会局職員 書記 吉田主任、櫻川主任
- 6 説明員 (総務部)
情報公開・法制課長
(未来創造部)
DX推進課長、交通まちづくり課長
(健康福祉部)
長寿福祉課長、こども未来課長、児童家庭課参事(家庭福祉)
(産業労働部)
国際経済課長
(教育委員会)
特別支援教育室長、高校教育課参事(教科・生徒支援)

○山本委員長 それでは、ただいまから令和5年度高校生県議会のSky-Highチームの委員会を開会する。

初めに、注意事項などについて幾つか申し上げる。

まず、発言の際は、挙手をして委員長の許可を得た上で発言をお願いします。また、必ずマイクを使用してほしい。お手元にあると思うので、発言を始めるときにスイッチを入れ、発言が終わったらスイッチを切ってほしい。

次に、会議中はパソコン、スマートフォンなどの使用が可能である。ただし、着信音などが鳴らないように設定をお願いします。また、撮影も可能であるが、ほかの人の発言の妨げにならないようお願いする。

次に、本日の出席者の自己紹介に移る。

副委員長から順にお願いします。

〔委員、説明者自己紹介〕

○山本委員長　それでは早速、議事に入る。

本日議論するテーマについては、次第にも記載してあるとおり、委員の皆さんに、考えていただいているので、まず委員からテーマについて発言をお願いします。また、テーマについて説明者に質問等があれば、併せてお願いします。

○湊委員　私たち道守高校定時制のチームは、おとしに引き続き、当事者の視点からの要望と提言を行いたいと考えている。

テーマは「声なき声、小さきか弱き声が、響く行政へ」として、私たち自身及び私たちの家族が日頃感じているお困り感に気づき、また気づいてもらい、その課題を一緒に改善していけるような取組をしていきたいと考えている。

私たちの学校は、多様な生徒が学んでいるが、いずれも経済的に恵まれていない家庭が多く、その多くがひとり親世帯で、全校生徒の約7割にもなる。また、そのひとり親も外国人1世で、2世の生徒が学校からの文書を翻訳して伝えているという場合も少なくない。通常の学校生活を送りたいけれども、外国人家庭やひとり親家庭特有の諸事情により様々な制約を受けているのが実情である。

しかし、それら特有の事情は福井県全体で見れば、あくまでも少数意見でしかない。少数か多数かという問題は比較の問題なので、少数者が存在することは必然ではあるが、その少数者が社会的な不利益を受けるということはよくないことだと考えている。

そこで私たちが考えたことは、お困り感について少数者が自ら声を上げること。そのお困り感に、多数派である周囲の人たちが気づくこと。その上で少数と多数とが一緒になって課題を解決する仕組みをつくることである。

実際、私もベルギーで生まれた帰国子女であるが、両親とも日本人の多数派である。けれども、この取組を通じて自分の知らなかったことに気づかされた。私と同様な気づきを多くの人と共有していきたいと考えている。また、少数者である私たちの要望を改善することによって、私たち以外のより多くの人たちにも改善の恩恵があるようにと、以下のような施策案に関する質問を考えた。

○中村(珠)委員　最初は、外国人家庭への情報支援についてである。

本校に限らず、最近ではコンビニなどの店舗や町工場の周辺でも多くの外国人を目にするようになった。令和2年10月1日時点の国勢調査によると、福井県の総人口は76万2,679人である。同じ令和2年12月末の福井県内の外国人居住者数は、1万5,713人であるので、全体の約2%ということになる。令和4年度の福井県学校基本調査によると、高校生2万458人のうち、外国籍の高校生は107人で、高校生全体の約0.5%である。ちなみに、そのうちの18人が道守高校生であった。

データから分かるように、多くの外国人が暮らしてはいるが、全体から見れば、まだまだ少数者である。私の母も外国人であるが、外国人にとって日本語習得は大きな



壁であり、多くの外国人が片言の日本語で話している。でも、話すことはできても読み書きは大変である。

福井県は、そのような外国籍の家庭への情報提供に関して、何か特別な配慮はされているのか。

○国際経済課長 外国人住民の皆さんへの情報提供については、県や県防災情報のポータルサイト、また県国際交流協会のホームページなどを、自動翻訳により、英語、ポルトガル語、ベトナム語、中国語など10か国以上の言語で御覧いただけるようになっている。また、重要な情報であったり、例えば新型コロナウイルス感染症など緊急性が高い情報については、県国際交流協会のほうで自分たちで訳して、英語、中国語、ポルトガル語で発信している。また併せて、福井県に住んでおられる日本語ができる外国人の皆さんを中心に、外国人コミュニティリーダーというものを委嘱して、外国人の皆さんが有するネットワークを通じて外国人のコミュニティの皆さんにSNSを使って母国語で情報発信してもらったり、協力をお願いしている。

○中村(珠)委員 情報が提供されていても、その情報がきちんと理解されなくてはならない。

そこで、理解された上で必要な手続ができているかどうかを知るために、外国人家庭からの、返送や返信が必要な書類などの返送率や回収率といったデータはあるか。

○国際経済課長 書類等の返送、回収率といったデータについては、県とか、あと外国人の住民の方が多いい市のほうでも確認したけれども、そういったデータというのは取られていないということになっていた。

ただ、そういう通知とか書類を受け取られた場合、県のほうで外国人の皆さんのためのワンストップサービスの相談窓口として、ふくい外国人相談センターというものを設置しているので、書類を受け取られた場合、そこに連絡していただければ、どのような書類か、どういった対応が必要かということをも母国語で相談対応できるような体制としている。

○中村(珠)委員 先ほどの質問の際にも申したけれども、国内在住の外国人の多くは片言の日本語で話している。日常会話であれば、意思疎通においては大きな障害はないと感じるが、外国人にとって難しい漢字が織り交ざった書面の理解は非常に困難だと思う。

県内の外国人の日本語の文盲率のようなデータの把握や収集はできているか。

○国際経済課長 県のほうで、外国人住民の皆さんが安心して住み続けたいと思っていただけるような共生社会の実現を目指して、2年前に、福井県多文化共生推進プランという計画を策定した。その策定に当たって、事前に外国人住民の皆さんを対象にアンケートを実施している。その際に、外国人住民の皆さんへの日本語に関するアンケートでは、「会話」、話すについては、「できる」「だいたいできる」というのが54%、「少しできる」というのが41%、「できない」というのが4%となっていた。「読み」

については、「できる」「だいたいできる」が47%、「少しできる」が44%、「できない」が5%。「書き」については、「できる」「だいたいできる」が約40%、4割。「少しできる」が48%、「できない」が約8%という結果であった。

アンケートからは、話すに比べて「読み」とか「書き」に課題を感じている外国人住民の方が多いいということが分かる。

○中村(珠)委員 日本語の読み書きの出来具合は差が大きいので、その把握は難しいと思う。私の母もスマホの翻訳アプリを使っているが、難解な文書が多い役所からの書類や病院での問診書の記入はとても大変である。

福井県の多文化共生推進プラン内に記載されている外国人に対するアンケート調査でも、生活上困っていることで、上位に病院や役所での手続が上がっている。その点において、どのような支援・設備拡充が行われているのか。

○国際経済課長 皆さん、行政手続、医療の場で、当然、言葉は難しいものである。先ほど説明したワンストップサービスとなる、ふくい外国人相談センターにまず相談していただければ、どういった手続が必要か、どういった申請が必要かということで、相談に対応させていただく。また、各市町においても、窓口タブレット端末——機械的な通訳で対応したりということも行っているし、窓口のほうに来ていただいたときに、市町とふくい外国人相談センターを結び、窓口に来られた方、通訳も含めて3者で相談できる体制も整えている。

○山本委員長 役所的なところもあるけれども、病院とかそういうのはなかなか難しいか。民間サービスというか。

○国際経済課長 病院についても、拠点病院というところがあるので、そこは外国語に対応した診察等を受けられるような形になっている。

また、医療通訳になると専門的な言葉も入ってくるので、福井県の国際交流協会のほうで、そういった医療通訳の育成ということも取り組んでいる。

○中村(珠)委員 様々な政策が行われていることを知った。

外国人のように日本語理解に難がある人はもちろん、お年寄りらも含めた多くの方が行政文書の言葉遣いが難解で、読みづらく、読もうとする気が起こらないと思っている人もいる。

そこで、私たちは2つの提案を考えている。

1つは、行政文書を分かりやすい単語に置き換えるということである。振り仮名などでは、難しい漢字はそのまま、小さい文字のルビを読むのは大変である。そのため、「氏名」といったものを「なまえ」、「最寄りの」を「ちかくの」といった簡単な語句での表現に置き換えるといいのではないかと考えている。また、簡単な言葉はアプリでの翻訳間違いも少ないと思う。

行政機関で統一された平易な言葉への置き換えのガイドラインのようなものはあるか。

○情報公開・法制課長 本県では、行政文書を作成する際のルールとして、ちょっとこれも分かりにくいかもしれないけれども、福井県公用文における用語、用字等に関する規程というものがある。その中において、一般の方に分かりづらい特殊な言葉や堅苦しい言葉を用いずに、日常一般に使われている易しい言葉を用いるなど、県民の方に分かりやすく伝える文書とするように定めている。

例えば、「僅少」というやや分かりづらい言葉を「少し」とか「わずか」という、日常生活で使われている分かりやすい言葉に言い換えをするよう例示したりしている。

日本語が不自由な方向けの言葉の置き換えガイドラインのようなものはないが、それぞれの担当の職場において、受け手に応じて分かりやすい文章としたり、補足資料を用いて説明するなどの工夫をしている。

分かりやすい言い換えの例など具体例の紹介も交えながら職員研修を行って、その中で受け手となる県民の方が読みやすく、より一層分かりやすい文書となるように努めていきたいと思っている。

○西野委員 2つ目は、イラストや動画での説明を多くするということである。

オリンピックなどの国際大会や国際会議、国際的な観光地でよく目にするピクトグラムは、言語が違ってても直感的に理解できるため、言語理解に限らず、多くの人に対する支援になり得るものだと考える。

言語理解に難がある人が多い老人介護や特別支援学校などでの、ピクトグラムなどの視覚支援を利活用している現場はあるか。

○特別支援教育室長 私のほうからは、まず特別支援学校でのピクトグラムの視覚支援への利活用についてお答えする。

まず、トイレや非常口などでのピクトグラムであるけれども、1964年の東京オリンピックや1970年代の大火事などの災害を契機に、国内の公共の場で広く使用されるようになった。その後、社会情勢に応じて、よりよく作られてきたという経緯、歴史がある。

特別支援学校について申し上げますと、平成25年、ちょうど10年前に新しくできた奥越特別支援学校では、トイレや非常口のほかに、ランチルームや保健室など全ての活動場所にピクトグラムを使用している。また、その他の学校を含めて、例えば知的障がいのある子どもたちが理解できるように、コミュニケーションのカードなどタブレット端末を活用した視覚支援も取り入れている。

こうしたピクトグラムなどの視覚支援は、共生社会の実現のためにも、障がいのある子への情報提供の一助としては大変有効であると認識している。

○長寿福祉課長 私からは、介護現場がどんな状況かということをお説明したいと思う。

皆さん御承知のとおり、介護現場というのは、認知症の方だとか高齢者の方が大変多くいる。そういったことで、今御提案いただいたような、ピクトグラムといったよ



うな絵文字を使って、誰でも分かりやすいような表示にするということはとても大事なことだと思っている。実際には、一番多いのはトイレとか入浴場の入り口にそういった絵文字が多く活用されている。またこのほかに、お年寄りがたくさんいるので、部屋の入り口、部屋の番号201号室とか301号室とかという番号の表示じゃなくて、例えばリンゴだとか象だとか、そういった名前に変えて、また施設の人がリンゴの絵を描いたり象の絵を描いたりして部屋の前に貼ることで、高齢者の方に視覚的に、すぐ部屋に戻れるように工夫して、それは大変効果があるというふうに聞いている。

○西野委員 観光を主管する国土交通省はJ I S規格に基づいているようであるが、行政機関共通のピクトグラムはあるのか。

○情報公開・法制課長 行政機関共通のピクトグラムということでは、災害時の避難場所とか化学品の危険・有害性など、全国的に統一されたピクトグラムの使用が望ましいものについて、J I Sに基づいて国が推奨するピクトグラムがある。例えば道路標識に使われるピクトグラムはJ I Sに基づくことが国土交通省の標識設置基準において定められている。

○西野委員 ピクトグラムは競技や会場を表現するものが多いようであるが、「記入する」「同封する」といった行為を表現するピクトグラムはあるか。

○情報公開・法制課長 ピクトグラムについては、誰でも自由に作成できるということで、自作のピクトグラムをインターネットで無料の素材として配布されている方もいる。「同封する」というような行為をピクトグラムで表現しているというのは確認できなかったが、「記入する」というものを表しているものはあった。

○西野委員 行政の受付や窓口での作業をピクトグラムで表現・視覚支援をすることで想定される支障はあるか。

○情報公開・法制課長 ピクトグラムについては、文字の代わりに視覚的な、図記号によって対象物とか概念とか状態に関する情報を表現するものに適しているのではないか、そういうことで案内などによく使用されているということである。

一方で、行政手続自体に関しては、適切に行うことが求められるので、手続内容や対象者によって条件などが異なる場合が想定される。見る方によって、使用するピクトグラムが意図しない形で別の意味に勘違いされて受け取られてしまうというようなケースが生じる可能性があって、そこら辺がちょっと支障なのかなというように思っている。

○西野委員 丹南高校や科学技術高校のデザイン科の課題研究で、ピクトグラムのデザインコンクールに応募したという話を伺った。ジェンダーフリーのピクトグラムのデザインを通じて、ジェンダーについて学ぶことができたそうである。

同様に、お困り感が多い行政サービスや病院での手続をピクトグラムで表現し、福

県内の自治体や病院で共通して使用するピクトグラムを、高校生たちが作成することは、デザインに関わった生徒たちも、お困り感の存在に気づき、共に解決する手段として、私たちの考える方向性に合致していると考えている。

県では、このようなピクトグラムデザイン公募を行うことはできないか。

○情報公開・法制課長　ピクトグラムは、言語と違って、外国の方でも簡単に理解できて、ユニバーサルデザインの観点からも優れたツールだなど思っている。主に不



特定多数の方が出入りする施設の案内などで活用が見込まれていて、これらの施設がさらに分かりやすく、アクセスしやすくする上でも有効なものと考えている。

若い皆さんの柔軟な発想で、ここをこうしたほうがもっと伝わりやすくなるんじゃないかというようなものがあれば、関係部署に積極的に紹介していきたいと思っている。

○西野委員　日本語理解に難がある人たちは、機器や人の支援があれば翻訳はできるが、記述することはハードルが高いのが実情である。実際、情報収集はスマホやパソコンで簡単にできているので、相談や申請などもスマホやパソコンで簡単にできるようになるととても助かる。デジタルだと翻訳アプリも使いやすいし、拡大しての視覚支援も可能といったように、行政手続のデジタル化を推進していくことは多くの人のメリットにつながる。

行政サービスのデジタル化の進捗状況について教えてほしい。

○DX推進課長　行政サービスのデジタル化の進捗状況についてお答えする。

皆さんが受験された高校受験、県立高校の入試も現在はオンラインで出願ということになっている。ほかにも除雪状況の見える化とか、実際の自動車の運転の挙動データを収集して、隠れた危険エリアを可視化するという交通安全マップというものも作成している。また、行政への申請や公共施設の予約については、県と市町が共同してシステムを構築していて、オンライン上から申請、予約ができるということになっている。

また、大野市では、マイナンバーカードのような身分証明書を窓口のほうで提示すれば、住所などの必要事項をあらかじめ省略することができるというような「書かない窓口」ということもやっていて、今後そういった動きが広まっていくというふうに考えている。

○西野委員　その際、外国人・高齢者への配慮はどのように進められているのか。

○DX推進課長　県では昨年度、県民が必要な情報を探しやすい、取得しやすいようにということで、県のホームページのトップページのほうを改修させていただいた。また、県のホームページについては、アクセシビリティ対策として、目の不自由な方

向けには読み上げ機能、外国人の方向けには多言語、14言語の翻訳機能を設けている。また、電子申請については、引っ越しとか育児といった生活シーンで絞り込むといった検索機能もつけている。

○西野委員　　多くの人に恩恵があるデジタル化ではあるが、一方で、機器が使えない、苦手だといったデジタル・ディバイドにも配慮が必要だと思うが、これに関してどのような対応をしているのか。

○DX推進課長　　デジタル・ディバイド対策であるが、総務省のほうでデジタル活用推進事業というものがあって、そちらのほうを活用して、携帯電話の通信事業者の店舗を活用した講習会、昨年であると24か所。また、地元の企業等による公民館等でのスマホ教室、こちらは3市町のほうで実施されているが、そういったものを開催してデジタル・ディバイド対策を行っている。

○西野委員　　行政手続に欠かせないのが本人認証だと思う。マイナンバーカードを持っていない人も少なくないので、私たちがよく使っているスマホの生体認証などを利用できると便利だと考えているが、スマホの生体認証などを利用した行政手続は可能なのか。

○DX推進課長　　スマートフォンの生体認証は、スマートフォンを利用する際に、あらかじめ登録した指紋等を使ってログインするというものであって、そのスマートフォンを使っている人が登録者だということを認証するものになる。一方で、行政手続上の本人確認というのは、なりすましを防止するということを徹底的に厳格に証明する必要があるため、マイナンバーカードとか運転免許証といった公的に証明されたものを活用しているところになる。



スマートフォンの一部の機種では、マイナンバーカードの機能、マイナンバーカードの中に入っている電子証明書をスマートフォンの中に取り込むというようなアプリをデジタル庁が公開しているので、それを使うと暗証番号を併用して電子署名をするというのではなくて、スマートフォン単体で生体認証を使って電子署名をするというふうに変わっていくので、今後こういったスマートフォンを使った生体認証での電子署名といったものが増えていくのではないかなというふうに思っている。

○湊委員　　次は、ひとり親世帯への支援についてである。

本校在籍生徒の半数以上がひとり親世帯である。令和2年の国勢調査によると、福井県の全世帯数が29万692世帯である。そのうちのひとり親世帯数は、母子家庭が2万2,031世帯、父子家庭が4,015世帯である。ひとり親世帯は全体の9%ということになる。その保護者の多くは、パートや派遣といった非正規労働者で、そのため働く時間

や日数が収入に直結する。子どもの看護のための病院への送迎や欠勤は仕方がないが、徒歩で通学できる小中学校とは異なり、交通の便が悪い保育園や高校への通園通学は保護者の送迎に頼らざるを得ない。その保護者が外国籍で運転免許がない家庭もある。標準世帯であればやりくりができることであっても、ひとり親世帯の場合はやりくりが困難な上に、収入も減ったり、必要以上の支出になったりしてしまう。さらに、保護者は子どもより先に家を出て子どもより後に帰るので、欠席状況を把握できないといった不安もある。しかしながら、保護者会などで学校に行く場合、シフトの調整、休暇取得が困難な上に、収入減の不安が重なる。

保育園への送迎や、高校への通学の利便性が向上すれば、送迎のための時間を仕事や家事などの別な時間に回せると思う。

保育園への送迎に関しては、送迎代行サービスや利用者同士の互助システムなどの支援があるとよいと考えるが、それらのサービスは安心・安全が最重要である。また、公立、社会福祉法人等の様々な事業者があるので、送迎も園によって様々で、送迎のニーズも利用者によって異なると思われる。であるので、送迎支援サービスは個々の利用者に対して行うほうがよいと思う。

さいたま市では、送迎保育ステーションという園児の預かり、送迎を担うサービスが提供されている。

福井県として、どの市町、どの福祉法人であっても利用できる送迎サービスは考えているか。

○こども未来課長　　まず、市町だったり、それから園、そういったところは地域の実情に応じて送迎バスも現在運行しているところである。現時点で330施設中56施設に80台の送迎バスが整備をされているところである。

また、各市町では、保育園などの利用調整を行う際に、ひとり親家庭の子の入園を優先する運用になっている。送迎バスなどがある保育園を希望する場合には優先利用という仕組みがあるため、この制度について市町と連携しながら県民の方々に積極的に情報発信してまいりたいと考えている。

他方、御指摘のとおり、送迎バスなどは運行時間が決められているなど、よりきめ細かなサービスに対応する観点から、子育て世帯に代わって子どもの送迎などを実施する、ふく育タクシーというものを今回新しく導入することとしている。本県としては、できるだけ多くの地域で、ふく育タクシーの運行が実施されるように、県内のタクシー事業者に対して積極的な働きかけを進めていきたいと考えている。

○湊委員　　ふく育タクシーについて、もう少し詳しく教えてほしい。

○こども未来課長　　ふく育タクシーは、妊婦や子育て世帯の負担を軽減することを目的として、通院、健診、買物、子どものみの送迎など、子育て世帯などの外出をサポートするタクシーであって、今年の秋頃に運行の開始を予定しているところである。

本県としては、ふく育タクシーの運行に協力をいただける県内のタクシー事業者に対して、妊婦や子どもへの配慮など運行に当たって必要な知識を習得するドライバー向けの認定研修を開催するほか、チャイルドシートなどの備品購入に係る補助や保育

料の補助を行っていく。

先ほども申し上げたけれども、できるだけ多くの地域でふく育タクシーの運行が実施されるように、県としてはしっかりと県内のタクシー事業者に対して御協力をお願いしていきたいというふうに考えている。

○湊委員 送迎の時間も働かざるを得ない人にとっては、利用料も低廉な料金でなければ意味がないと思われる。できれば所得に応じて無料だったり、ひとり親家庭の割引などの減免措置はあるか。

○こども未来課長 子育て世帯の経済的負担の軽減、これは県としても非常に重要なテーマだと考えていて、ふく育タクシーと送迎サービスの利用料というものも、なるべく低廉であるほうが望ましいというふうに考えているところである。

一方で、安価な利用料金を設定した場合には、それ相応にニーズが大きくなってきてしまうというところで、サービスの担い手、ふく育タクシーの場合でいえばタクシードライバーが十分に確保できるかという課題もあるというふうに認識をしている。

このため、ふく育タクシーについては、まずは子育て世帯向けに、この秋に発行予定のふく育ポイントというものがあって、こちらの対象とすることで少しでも安価な利用料金で利用できるようにしたいと考えている。その上で、今後のふく育タクシーの在り方については、実際の運用の中で課題をしっかりと検討していきながら、必要に応じて関係者とも議論していく。



なお、ひとり親家庭に対しては、生活援助が必要な場合に家庭生活支援員という方を派遣する事業を行っていて、その事業において保育園などの送迎支援なども行えることになっている。

○湊委員 高校生は自力通学が基本であるが、遠方の場合、公共交通機関の乗り継ぎや時間が合わない場合が多いので、道守高校に限らず保護者の送迎は少なくない。県内のどの高校も高校の近くには必ず公共交通機関の停留所があるので、高校の立地が問題ではなく、その接続の利便性が悪いのである。道守高校はスクールバスがあり、周囲には2つのバス路線もあるが、いずれも福井駅が起点となっているため、それらのバスに乗るためには福井駅まで行ってから乗り継がなくてはいけなく、無駄な時間と費用をかけている。バスの路線や便数を増やすことは大変だと思うので、既存の路線の接続性を改善するだけでも効果が上げられると思う。

また、先日、市内のバス事業者がI C O C Aを導入するという報道を見た。電子マネーは、スマホでのタッチ決済であるので、電子マネーの利便性を生かしてバスの乗り継ぎといった接続性も改善できると考える。地下鉄は路線の乗り継ぎができるが、福井には地下鉄はなく、バス路線の乗り継ぎはあまり事例がない。

海外の大都市なので事例にはふさわしくないが、ニューヨークやロンドンのバスはバス路線に近接する停留所で一定時間以内であれば、トランジット、つまり乗り継ぎ

は無料でできる。神戸市や大阪市の市バスも異なる路線の乗り継ぎ割引がある。福井のような小さい都市だと路線が少ないが、少ないからこそ、より一層の事業者間の連携が必要だと思う。共通電子マネーであれば、異なる事業者であってもスムーズな乗り継ぎは可能だと思われるが、現時点でのバス路線の乗り継ぎを行う際の障壁は何か。

○交通まちづくり課長 福井県内では、主に福井市や坂井市、奥越などは京福バスが運行している。越前市や鯖江市などは福井鉄道バスが運行しているという状況である。地域内で同じバス会社になっているので、同じバス会社の場合、利用される学生さんには割安の定期券が用意されているということで、乗り継ぎによる新たなコストというのは発生しないかなと考えている。

市内での乗り継ぎというのは大きな支障はないのかなと思うけれども、I C O C A 導入に向けて、より利便性が高くなるように、今ほどいただいた御意見については交通事業者にもお伝えをして、検討していきたい。

○湊委員 路線やダイヤの見直しの際、利用者の意見、要望を反映できる仕組みはあるか。

○交通まちづくり課長 路線バスとかコミュニティバスの経路とか運行時間の見直しを行う場合には、公共交通会議というのが各市町に設置されているけれども、そこで協議する必要がある。その公共交通会議というものには、法律上、住民の方が構成員として定められているので、利用者の方の意見を反映する、そういった仕組みになっているところである。

○湊委員 もしそのような仕組みがあるのであれば、当事者の高校生の代表が参加できないか。

○交通まちづくり課長 今ほど申し上げた公共交通会議であるけれども、利用者の代表ということで、市町によっては規模の小さいところだと学校の校長先生なんかに参加されているところがある。福井市は学校の数も多いので、高等学校 P T A 連合会が福井市の公共交通会議の委員になっているという状況である。

学校の P T A の方とか、学校の先生方を通じて、そういった皆さんの意見を公共交通会議のほうに反映ができるという仕組みになっているので、また学校内で協議いただければと思う。

○湊委員 先ほど申した I C O C A 導入までの間、乗り継ぎの簡易な証明を整理券などでできないか。

○交通まちづくり課長 今ほどの乗り継ぎであるけれども、例えば鯖江市であるとか坂井市であるとか、そういったところはコミュニティバスという市内を走っているバスがあるけれども、そこについては乗り継ぎ券を発行して、一回のバス乗車で目的地まで行くことができない場合に乗り継ぎをして割引になるといった制度がある。

路線バスについては、ICOCA導入に向けて、こういったことができるのかという
ことを今ほど御意見もいただいたので、また事業者と対話をして検討していきたい。

○湊委員 運転免許のない中高生の通学定期限定のサービス、または公的支援は
できないか。

○交通まちづくり課長 学生さん用の定期であるけれども、通常の通勤の定期より
も非常に割安で設定されている。大体、京福バスでいうと通勤定期よりも3割近く安
い状況である。一部市町、例えば大野市とか越前町など、学校から結構遠いような市
町については、通学の定期の費用を一部助成しているところもあるので、そういった
情報を各市町のほうに、いろんな会議の場等もあるので、そういった場を活用して情
報提供をしているところであるし、今後もそういった情報をお伝えをしていきたいと
思う。

○湊委員 最近の学校からの通知には、教員の働き方改革のため、来校は16時45分
までをお願いしたいとあり、保護者懇談や学校行事のためには仕事を休まざるを得な
い。ほとんどのひとり親世帯の保護者は非正規雇用なので、休む場合は給料が減って
しまうことが多いようである。私もアルバイトをしているので、有給休暇制度につい
て調べてみたが、いろいろ条件があるようである。

事業者もしくは対象者への公的な支援があるとよいが、子育て、ひとり親支援とし
て直接対象者を支援する、例えば有給で学校に行ける、または休むことによって生じ
る収入を補填するような公的支援制度をつくることはできないか。

○児童家庭課参事(家庭福祉) 有給休暇についてであるけれども、労働基準法では、
正社員、パート、アルバイト、派遣などの雇用形態にかかわらず、おっしゃったとお
り条件はあるけれども、6か月以上在籍してい
る職員に対して、会社は有給休暇を付与しな
ければならないというふうにされている。ただ、
雇入れの日から6か月未満の場合、学校行事の
ために休んだ場合は無給ということになってし
まう。



ひとり親家庭など子育て家庭の保護者の方が
安心して休暇を取得できる環境をつくっていく

ことは非常に大事だと思うが、有給休暇を付与するというのは企業側のことであるの
で、法律上の義務を超えて休暇を与えるということは各企業の理解と協力が必要な部
分であるので、なかなか難しいことではある。

県としては、ひとり親家庭が安定した生活をおくるために、非正規などの安定しな
い生活から正社員など安定した職業に継続して就けるように支援することも大事だと
いうふうに考えていて、御本人の希望も聞きながら、こういった職種に就くといいか
とか、就職するまでにどんな資格を取ると有利になるかというような就職するまでの
計画をつくったり、就職に役立つ資格を取得するときにかかる費用の一部を支援する

などの支援策を講じているところである。

新たに今年度から、ひとり親家庭がより高い能力を身につけて経歴を高めること、キャリアアップというけれども、そういったキャリアアップを目指したセミナーを開催したり、資格を取るために学校なんかに通うような場合に、一部本人負担が発生していた費用を無償にできるような制度の拡充をしているところである。

○山本委員長　ほかに発言はないか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○山本委員長　それでは、ほかに発言もないようなので、ここで休憩する。再開時間は後ほどお知らせする。理事者の方は退室願う。

～休憩～

○山本委員長　それでは、休憩前に引き続き委員会を開く。

それでは、先ほどの議論を踏まえて、最終の提言書案を作成したいと思う。

お手元にある提言書案について修正したほうが良い部分があれば、皆さん発言を願う。

○湊委員　提言案の3番にある「遠隔地から通う高校生が、保護者の送迎などに頼らず、公共交通機関で円滑に通学できるよう、バス・トランジットの導入やダイヤ・路線の策定を検討すること。また、検討に当たっては、当事者である高校生の意見をとりいれていくようにすること」というふうに訂正を。

○山本委員長　ただいま、湊委員から、「高校生が参加できるようにすること」の部分を「高校生の意見をとりいれていくようにすること」というふうに修正したいとの発言があったが、そのように修正してよろしいか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○山本委員長　特に異議もないようなので、そのように修正する。

ほかにないようであるので、提言書案については、修正した案のとおりとし、再開後に申し渡しを行うことでよろしいか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○山本委員長　特に異議もないようであるのでそのようにする。

それでは、再度休憩する。14時30分まで休憩する。

～休憩～

○山本委員長 休憩前に引き続き委員会を再開する。

先ほどの議論を踏まえて、県に対し提言書を提出することが決定している。提言書の案はお手元に配付してある。このことについて委員より説明をお願いする。

[委員、別紙「社会的弱者支援に関する提言「声なき声、小さきか弱き声が、響く行政へ」」に基づき、説明]

○山本委員長 説明は終わったので、ただいま説明のあった提言書を提出させていただく。

湊委員、情報公開・法制課長は、こちらのほうまでお願いする。

[提言書申し渡し]

○山本委員長 それでは、席にお戻り願う。

提言書の提出が終わったので、以上で議事は終了する。

これにて、高校生県議会のSky-Highチームの委員会を閉会する。

～ 以 上 ～



社会的弱者支援に関する提言

「声なき声、小さきか弱き声が、響く行政へ」

令和2年の国勢調査によると、福井県の総人口は、762,679人で、その約2%の15,713人が外国人居住者数です。高校生に限定し、令和4年度の福井県学校基本調査によると、高校生20,458人のうち、外国籍の高校生は、107人で、高校生全体の約0.5%です。また、世帯総数は、291,662世帯で、そのうち、母子家庭が22,031世帯、父子家庭が4,015世帯で、ひとり親世帯は、全体の9%弱になります。いずれも経済的に恵まれていない現状があります。

外国籍家庭、ひとり親家庭という少数者が、社会的弱者となっている一因に、当事者の声の反映、情報の不均衡によって、国、県、市町の行政支援が充分に行き届いているとは言えない現状があります。さらに、少数者が社会的弱者として固定化されることは、社会的公正性に欠け、共生社会の実現にも反すると考えます。

これらの当事者でもある私たちは、当事者視点に基づくニーズの把握と適切な双方向の情報共有を基礎とし、よりユニバーサルな視点と当事者参加の観点から、次の事項について提言します。

1. 行政文書および窓口業務における視覚的理解支援の一つとして、言語を理解することが難しい人でも認知しやすいように、県・市町共通の行政ピクトグラムを策定すること。また、このピクトグラム策定の趣旨を周知することを目的として、デザインを高校生から公募すること。
2. 外国籍など日本語を理解することが困難な人が、スマートフォンやパソコンで情報収集することと同様に、簡単に行政相談や申請等ができるよう、行政手続きのDX化を推進し、全ての県民の行政へのアクセス権を保障すること。
3. 遠隔地から通う高校生が、保護者の送迎などに頼らず、公共交通機関で円滑に通学できるよう、バス・トランジットの導入やダイヤ・路線の策定を検討すること。また、検討に当たっては、当事者である高校生の意見をとりいれていくようにすること。
4. 非正規雇用のひとり親家庭の保護者が、経済的な理由などを気にせず、学校行事等に参加できるように、学校行事参加手当等の補償を検討すること。

令和5年8月1日

福井県知事 杉本達治様

福井県立道守高等学校

チーム「Sky-High」

湊希八 杉本優姫 笠松美樹

中村珠月玖 西野 ジャネール

◇写真撮影◇

丸岡高校 ☆ チーム「3233系」



福井南高校 ☆ チーム「Mama's Bank Account」



敦賀高校 ☆ チーム「ONDOツルガ」



藤島高校 ☆ チーム「AGORA」



道守高校 ☆ チーム「Sky-High」



————— 御協力いただいた皆様、ありがとうございました。